貝塚市埋蔵文化財調査報告　第58集

貝塚市遺跡群発掘調査概要23

2001. 3. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は北に大阪湾を望み、南に和泉山脈を仰ぐ、穏やかな気候と多くの緑に恵まれた地域であります。このような自然環境によって豊かな土壌が育くまれ、市域には昔から多くの人々がさまざまな営みを繰り返し、多くの文化遺産を残しました。

今日残る文化遺産には地上にある神社仏閣、古文書等のほかに、地中に埋もれた古人の生活痕跡を残す埋蔵文化財があります。華やかではありませんが、地中に刻まれた人々の痕跡はその時の先人達の営みを如実に語ってくれる貴重な語り部と言っても過言ではないでしょう。埋蔵文化財は今日の開発によりその大半が壊されてしまう運命にあります。しかしこうした痕跡を記録することによって先人の残した歴史を明らかにし、未来へと語り継ぐことができるものと考えます。

今回、平成12年度中に実施いたしました緊急発掘調査の結果を報告いたします。開発に伴う調査で、大部分が非常に小規模ではありますが、現市域に住んでいた人々の生活を考える上で欠かせない多くの成果を得ることができました。本書を刊行することにより、皆さまの文化財に対するご理解を深めていただく一助となれば幸いに存じます。このような一つ一つの積み重ねがパズルのようにやがて大きな歴史解明へとつながっていくものと考えます。

また、発掘調査ならびに本書の作成にあたり、関係各位には多大なご指導、ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成13年3月31日

貝塚市教育委員会

教育長　山本　太三郎

例　　言

1．本書は貝塚市教育委員会が平成12年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告である。

なお、遺物整理の都合から一部平成11年度調査についても掲載している。

2．発掘調査は平成12年４月１日より実施し、平成13年３月31日に終了した。

調査担当は以下の通りである。

平成11年度調査　　貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係

前川浩一、上野裕子、木嶋崇晴

平成12年度調査　　貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係

前川浩一、三浦　基、上野裕子

3．本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は上野が行った。

4．図６～23の調査図面については、調査地位置図は縮尺１／5,000、方位が座標北を上に統一している。また、調査区位置図の方位は磁北を示している。

5．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、挿図目次、図版目次）

第１章　平成12年発掘調査の概要 …… 1
第２章　調 査 結 果
Ⅰ　貝塚寺内町遺跡 …… 7
1999－67区、2000－６区、2000－16区、2000－17区、2000－31区、
2000－34区、2000－41区、2000－46区、2000－48区
Ⅱ　沢　城　跡　1999－69区、2000－25区 …… 15
Ⅲ　沢新開遺跡　2000－８区 …… 17
Ⅳ　澱 池 遺 跡　2000－20区 …… 18
Ⅴ　土 生 遺 跡　1999－61区 …… 19
Ⅵ　地蔵堂廃寺　1999－66区 …… 20
Ⅶ　名 越 遺 跡　2000－12区、2000－22区 …… 21
Ⅷ　清 児 遺 跡　2000－47区 …… 23
Ⅸ　ま　と　め …… 24

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図（Ｓ＝1/10,000）
図３　調査地位置図（Ｓ＝1/10,000）
図４　調査地位置図（Ｓ＝1/10,000）
図５　貝塚寺内町遺跡調査地位置図（S＝1/5,000）
図６　1999－67区
図７　2000－６区
図８　2000－16区
図９　2000－17区
図10　2000－31区
図11　2000－34区
図12　2000－41区
図13　2000－46区
図14　2000－48区
図15　1999－69区
図16　2000－25区
図17　2000－８区
図18　2000－20区
図19　1999－61区
図20　1999－66区
図21　2000－12区
図22　2000－22区
図23　2000－47区

図版目次

図版１　貝塚寺内町遺跡（2000－17区）
１．調査区全景
２．ＳＸ－２（井戸）
図版２　貝塚寺内町遺跡（2000－31区）
１．調査区全景
２．北西側断面
図版３　貝塚寺内町遺跡（2000－46区）
１．調査区全景
２．北東側断面
図版４　澱池遺跡（2000－20区）
１．第１区全景
２．第１区南西側断面
図版５　澱池遺跡（2000－20区）
１．第２区全景
２．第２区北東側断面
図版６　土生遺跡（1999－61区）
１．トレンチ１全景
２．流路部分断面
図版７　土生遺跡（1999－61区）
１．トレンチ２全景
２．遺物出土状況
図版８　名越遺跡（2000－12区）
１．調査区全景
２．南東側断面

表目次

表１　平成12年国庫補助事業一覧
（平成12年１月～12月）

第１章　平成12年の調査概要

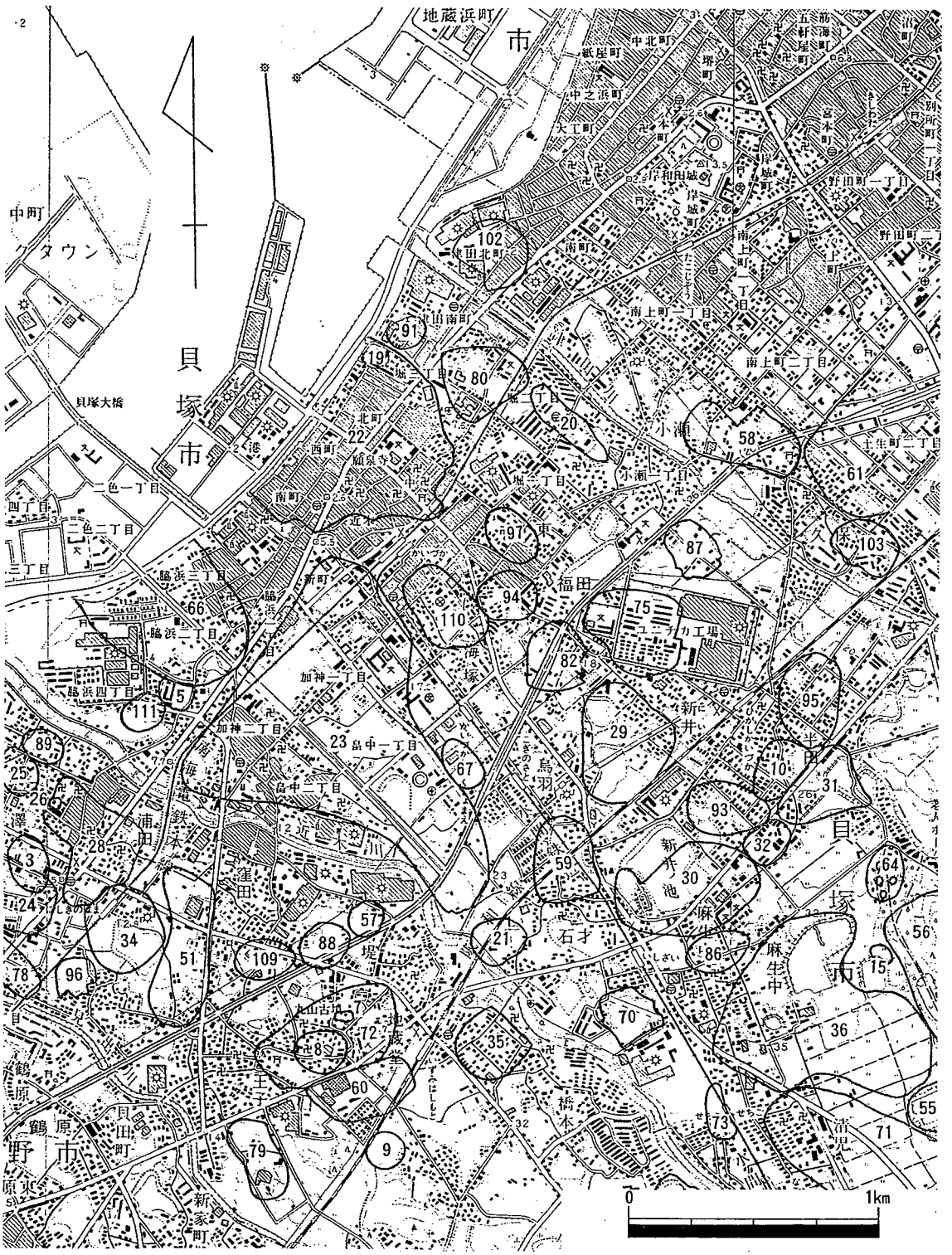
平成12年は埋蔵文化財発掘届出書等提出数227件、遺跡外試掘調査依頼24件を数える。届出数は平成11年と比較すると42件減少している。

開発内容については、ガス、水道、下水道等の公共事業を除くと個人住宅建築・増改築によるものが83件と圧倒的に多い。次いで分譲住宅建築とそれに伴う宅地造成によるもの44件が続く。規模の小さな開発が主体で、様々な要因があげられるが主に不況の影響によるものと考えられる。大規模店舗、共同住宅等の開発は例年と比較して数少なく届出数の20パーセントに満たない。

発掘調査は届出に関わる確認調査50件、立会調査56件を実施した。このうち国庫補助対象となる個人住宅建設に伴う調査は18件である。調査を実施した遺跡は27遺跡である。13件の調査を行った貝塚寺内町遺跡をはじめとして、沢城跡、沢新開遺跡等市域海岸部の南海電鉄から府道堺阪南線にかけての一帯に集中している。南海電鉄より南東の中位段丘上では各遺跡に１～２件の調査を実施している。遺跡外の試掘調査は16件を実施した。そのうち１件については千石堀城跡の遺跡範囲拡大登録を行った。

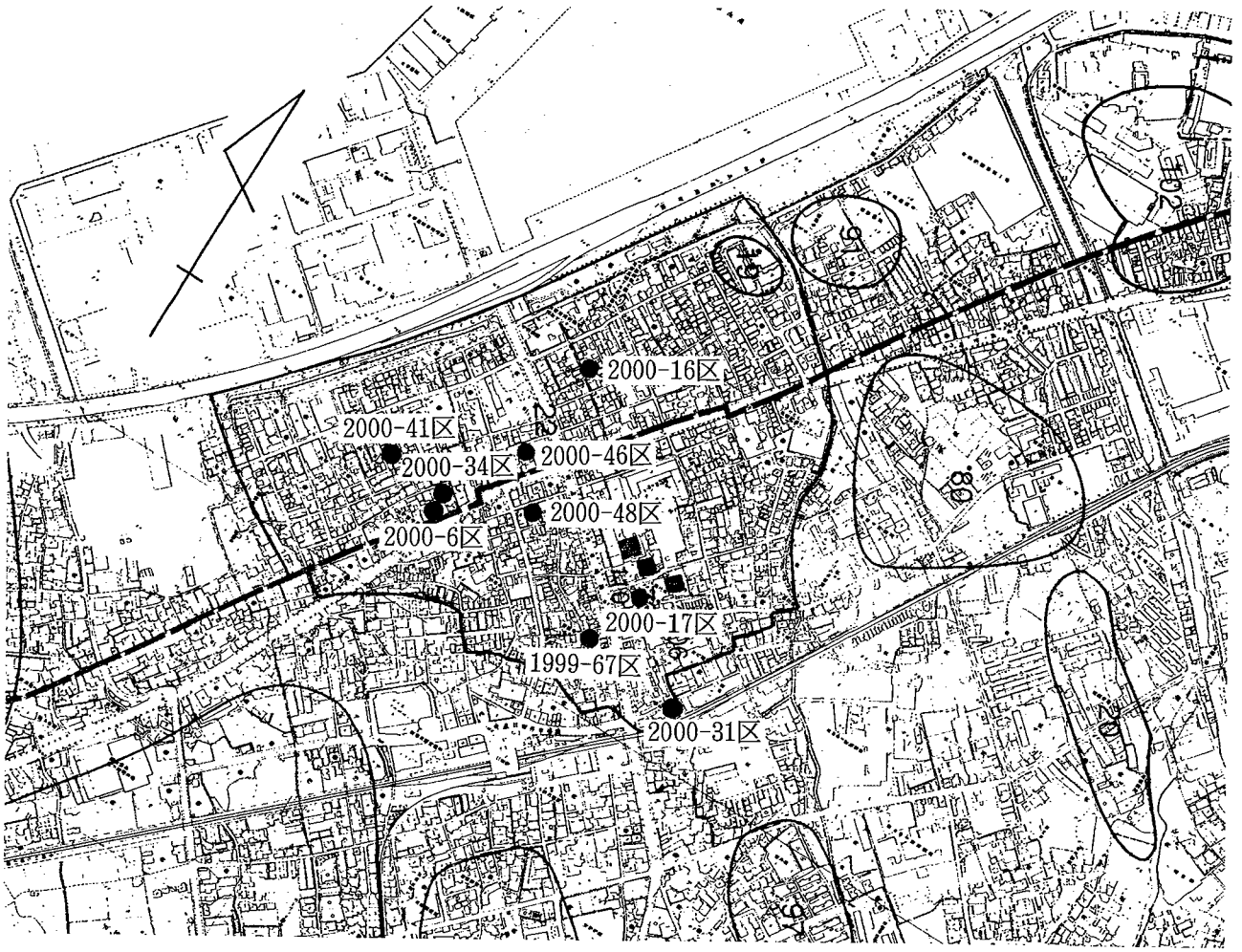
	遺跡名	調査番号	遺跡略号	開発地
	（平成11年度）			
1	土生遺跡	99－61	ＨＢ	久保509－３の一部
2	地蔵堂廃寺	99－66	ＧＺＺＨ	地蔵堂251の一部
3	貝塚寺内町遺跡	99－67	ＪＮ	中934
4	沢城跡	99－69	ＳＪ	沢659－１、－２の一部
	（平成12年度）			
5	貝塚寺内町遺跡	2000－６	ＪＮ	南町1195－４
6	沢新開遺跡	2000－８	ＳＳ	沢1046－１、３
7	名越遺跡	2000－12	ＮＧ	清児358－５、358－１
8	貝塚寺内町遺跡	2000－16	ＪＮ	北町503、504、507
9	貝塚寺内町遺跡	2000－17	ＪＮ	中844
10	澱池遺跡	2000－20	ＴＩ	澤635－１、643－２
11	名越遺跡	2000－22	ＮＧ	名越207　－２
12	沢城跡	2000－25	ＳＪ	浦田134
13	貝塚寺内町遺跡	2000－31	ＪＮ	中字感田1546－５
14	貝塚寺内町遺跡	2000－34	ＪＮ	南町1142－３
15	貝塚寺内町遺跡	2000－41	ＪＮ	南町1354－８
16	貝塚寺内町遺跡	2000－46	ＪＮ	南町659－７
17	清児遺跡	2000－47	ＳＧ	麻生中750－１
18	貝塚寺内町遺跡	2000－48	ＪＮ	西町729

表１　平成12年国庫補助事業一覧（平成12年１月～12月）



3．沢遺跡　5．長楽寺跡　7．(国史跡)地蔵堂丸山古墳　8．地蔵堂廃寺　9．下新出遺跡　10．秦廃寺　15．麻生中新池遺跡　19．泉州麻生塩壺出土地　20．堀遺跡　21．橋本遺跡　22．貝塚寺内町遺跡　23．加治・神前・畠中遺跡　24．明楽寺跡　25．沢共同墓地遺跡　26．沢西出遺跡　28．沢城跡　29．新井・鳥羽遺跡　30．新井ノ池遺跡　31．半田遺跡　32．麻生中遺跡　34．澱池遺跡　35．積善寺城跡　36．清児遺跡　51．窪田遺跡・窪田廃寺　55．槍ヶ谷城跡　56．半田遺跡(清児地区)　57．堤遺跡　58．小瀬五所山遺跡　59．石才遺跡　60．王子遺跡　61．土生遺跡　64．海岸寺山遺跡　66．脇浜遺跡　67．今池遺跡　70．石才南遺跡　71．名越遺跡　72．地蔵堂遺跡　73．名越西遺跡　75．新井・鳥羽北遺跡　78．沢西遺跡　79．王子西遺跡　80．津田遺跡　82．福田遺跡　86．麻生中出口遺跡　87．小瀬遺跡　88．堤三宅遺跡　89．沢新開遺跡　91．堀新遺跡　93．麻生中下代遺跡　94．堀秋毛遺跡　95．半田北遺跡　96．沢老ノ塚遺跡　97．東遺跡　102．津田北遺跡　103．久保遺跡　109．窪田ハマデ遺跡　110．海塚遺跡　111．脇浜川端遺跡

図１　貝塚市遺跡分布図



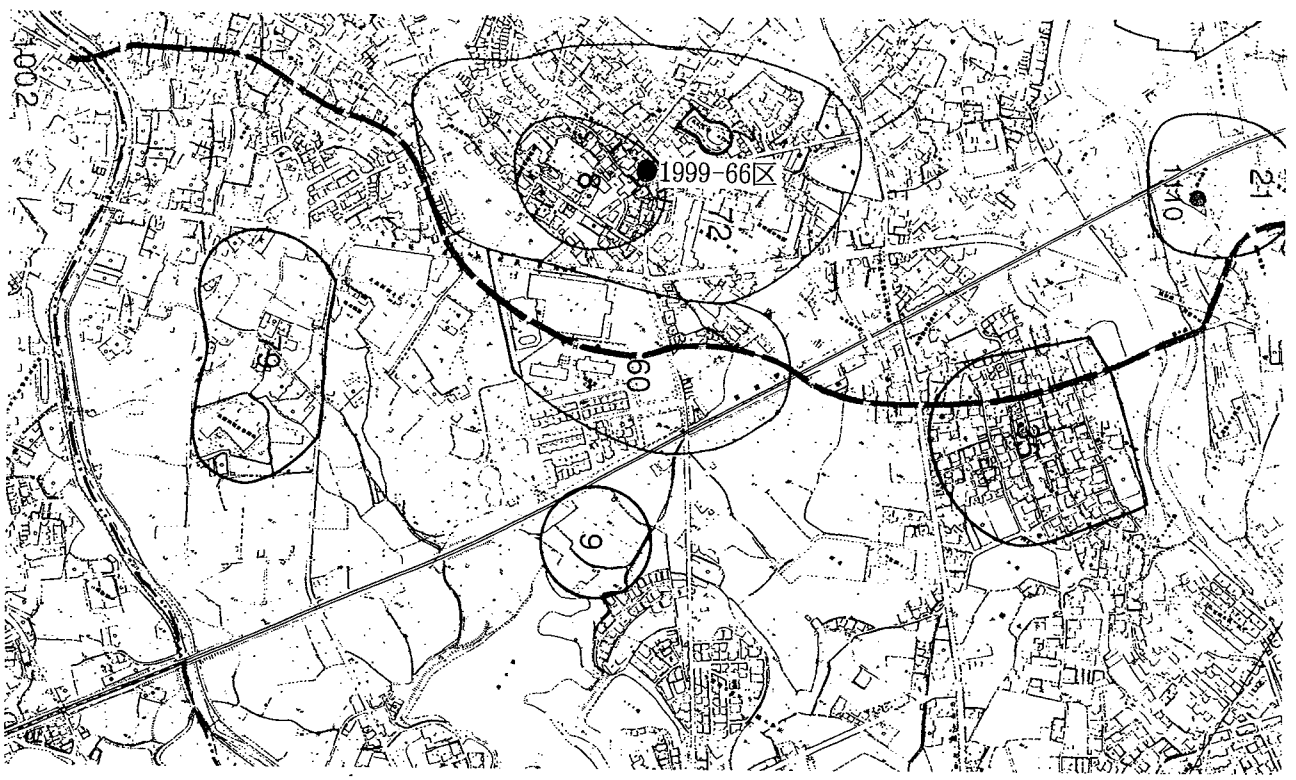
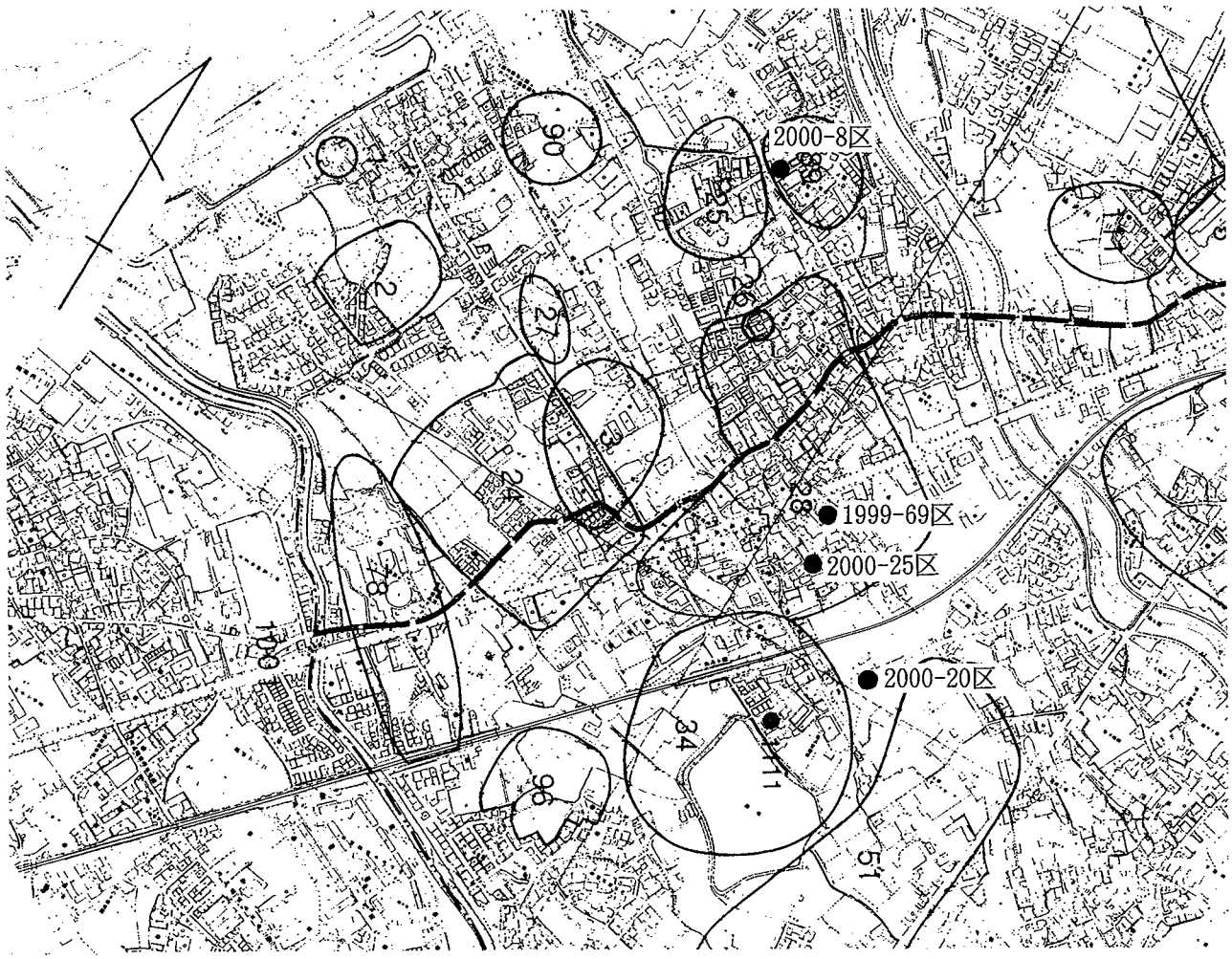


図2　調査地位置図（S＝1／20,000）



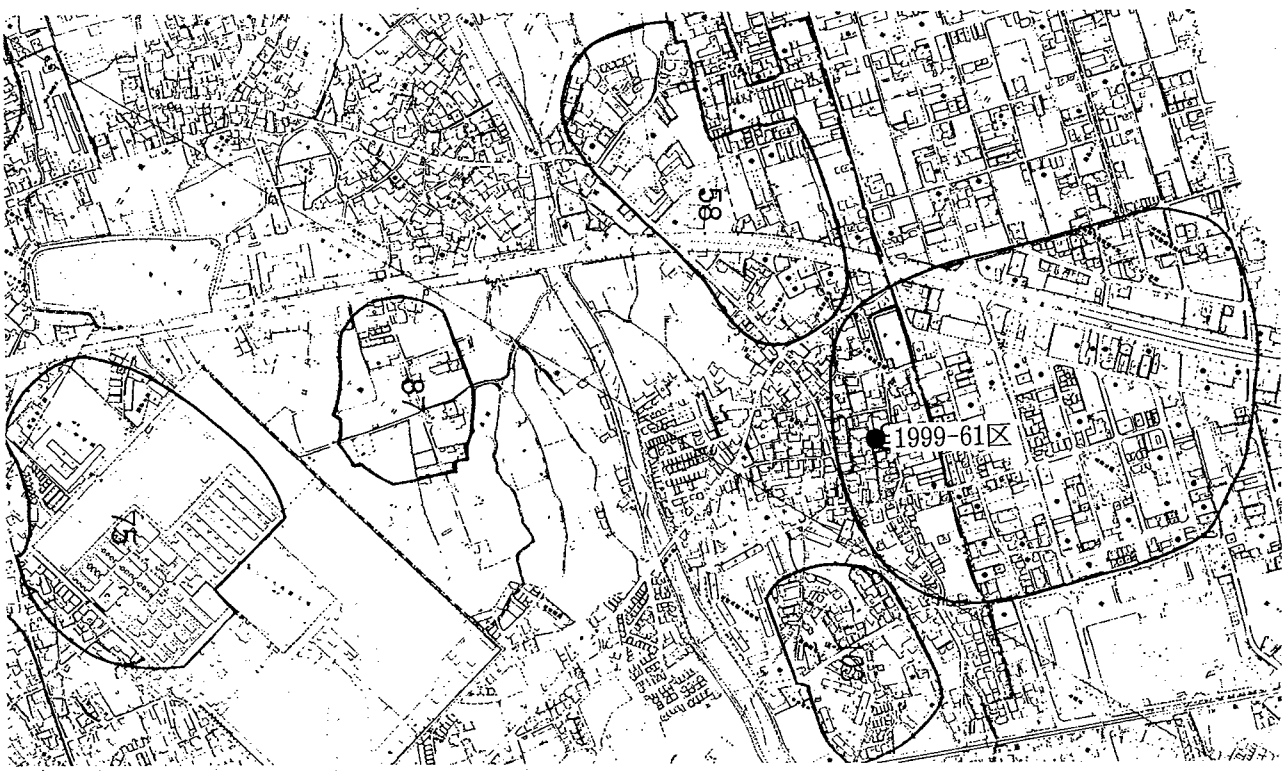


図3　調査地位置図（S＝1／10,000）

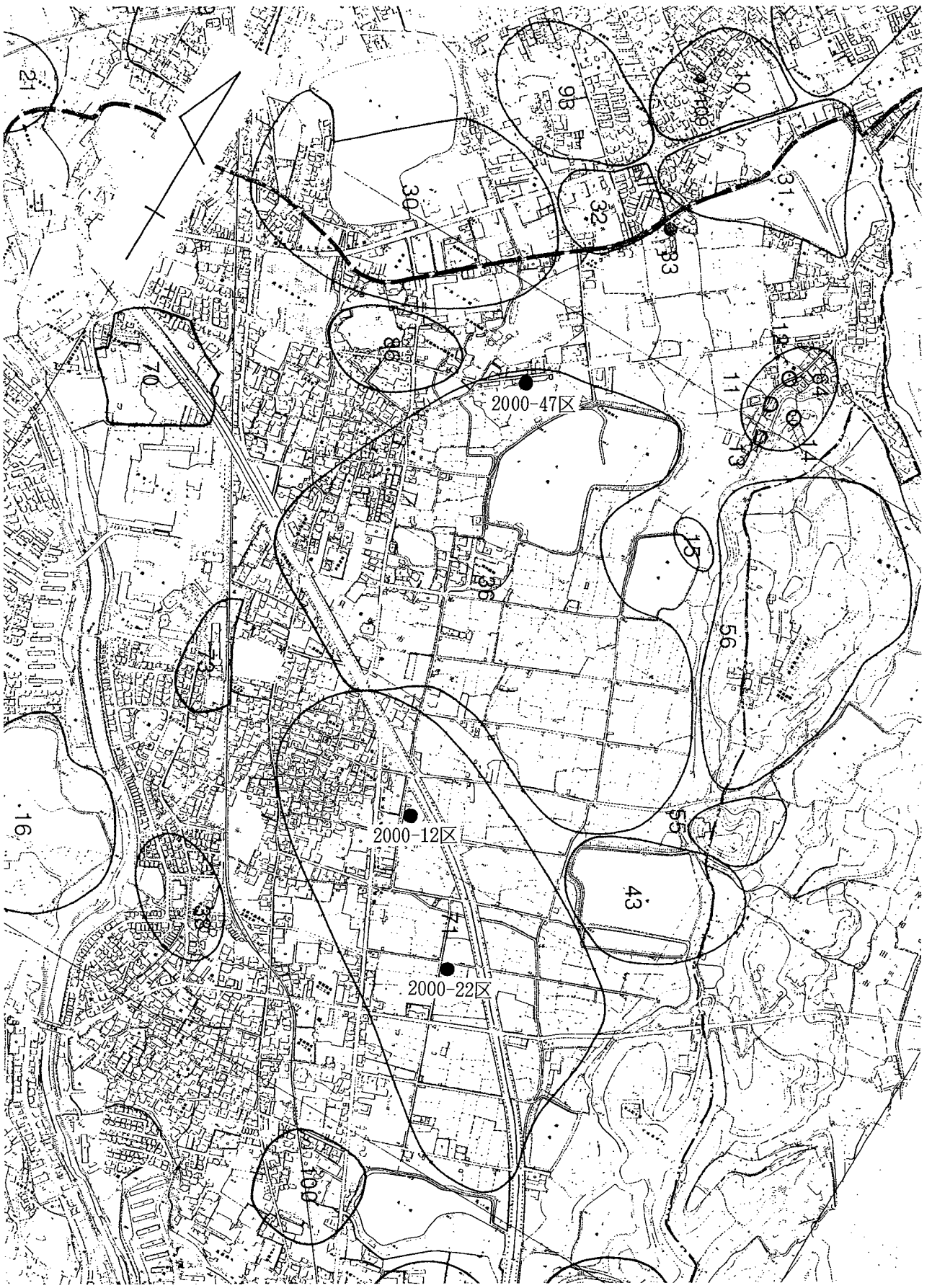


図4　調査地位置図（S＝1／10,000）

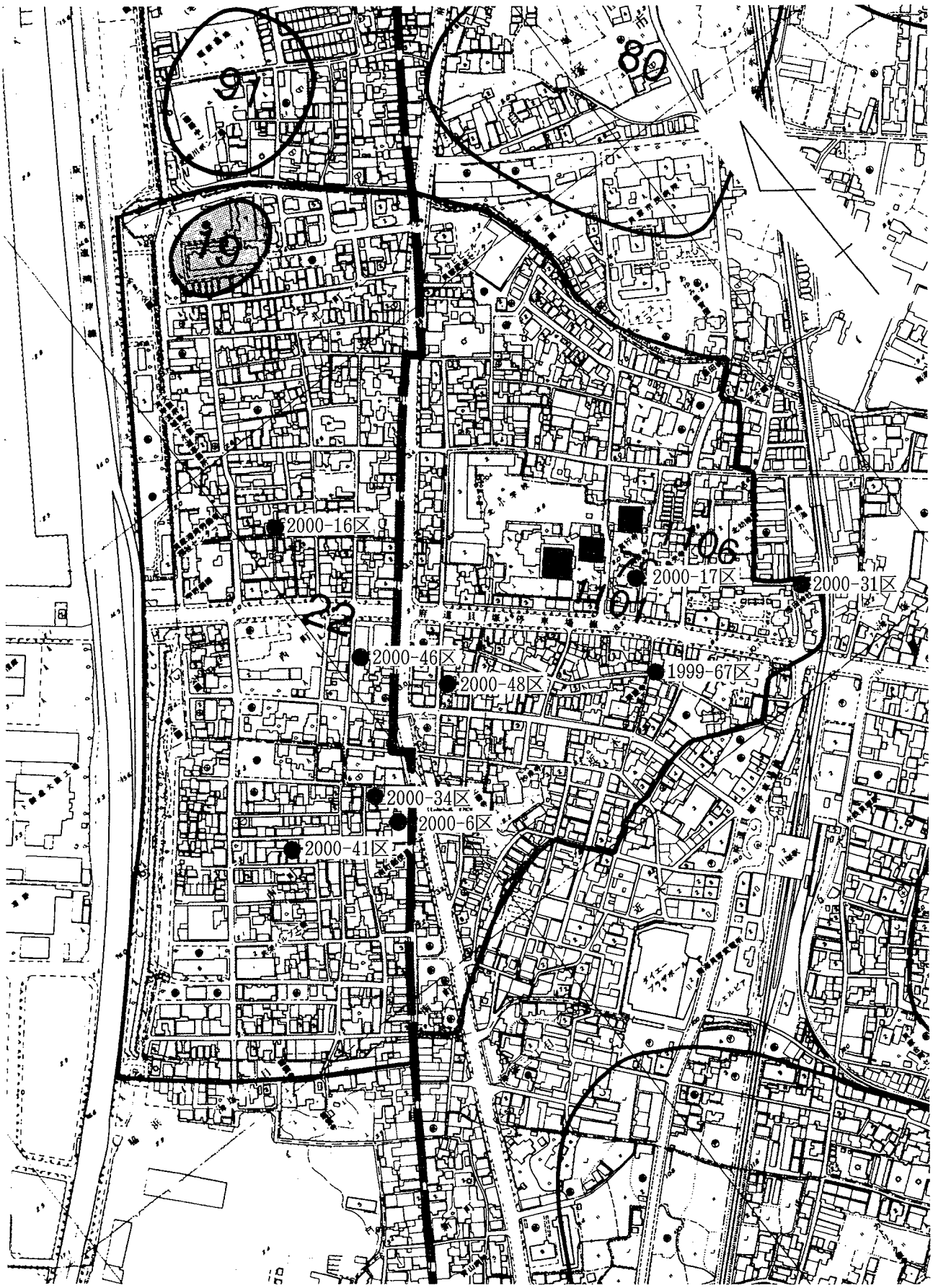


図５　貝塚寺内町遺跡調査地位置図（Ｓ＝１／5,000）

第2章　調査結果

Ⅰ　貝塚寺内町遺跡

貝塚寺内町遺跡は貝塚市北西部の大阪湾に面した場所に位置する。中世に成立し江戸時代を通じて願泉寺を中心に栄えた都市遺跡である。遺跡は紀州街道をはさんで海抜２～３ｍの砂堆部から中位段丘端部にかけて広がり、北を北境川、南を清水川に区切られた南北800ｍ、東西850ｍを測る範囲である。

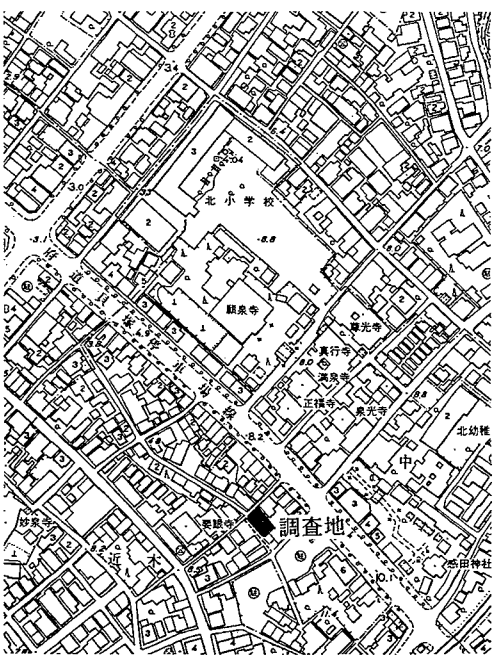
発掘調査は平成４年度より本格的に実施するようになり、遺跡の大まかな状況が明らかになりつつある。調査では中位段丘下の紀州街道沿いに16～17世紀代の遺構、遺物が集中する一帯があり、寺内原集落の可能性が高い。その後、海抜２ｍの砂堆部～段丘上へと広がりをみせる。

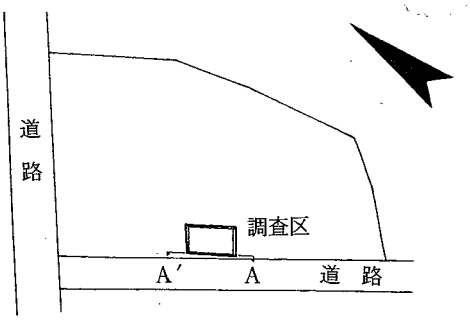
1999－67区の調査

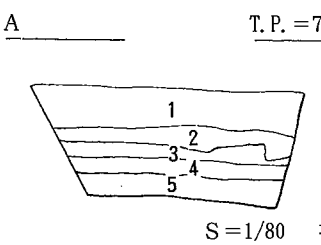
本調査を実施したのは貝塚市中934である。

調査は調査地西側に、南北方向、約 1.5×３ｍの調査区を設定し実施した。調査区内には５層の土層が堆積していた。上から順に盛土（第１層、層厚約0.4m）、暗黄褐色粘質土混粗砂（第２層、層厚約0.2～0.3m）、紫灰色砂礫混粗砂（第３層、層厚約0.1～0.2m）、黄灰色砂礫混粘質土（第４層、層厚約0.2m）、暗紫灰色炭混粘質土(第５層、層厚約0.25m）である。地山は灰色砂礫で、現地表面より約1.2mで検出した。

第１層は現代の瓦等を多く含み、既存建物解体時の土と思われる。第２・４層は土間層、第３・５層は整地土である。生活面は断面観察により２面確認した。１面は第４層上面である。第４層は粘質土で固く締まっている。上面はまっすぐ平らである。２面は第２層上面と思われるが、







1：盛土
2：明黄褐色10YR7/6粘質土混粗砂
3：紫灰色5P5/1砂礫混粗砂
4：黄灰色2.5Y5/1砂礫混粘質土
5：暗紫灰色5P4/1粘質土（炭混じり）
地山：灰色5Y6/1砂礫

図６　1999－67区

上層の盛土時に攪乱されている。しかし堆積土中に粘質土ブロック等を多く含み、塊部分を観察すると固く締まっているため、土間層であった可能性は高いと判断した。第５層は炭等を含むが締まりがなく、他所から土を運んで整地したものと考えられる。

遺物は５層より和泉音羽焼土瓶、肥前系磁器が出土した。いずれも幕末～明治期のものである。その他盛土より肥前系磁器、瓦、土師質土器等が出土している。

地山上面には遺構、遺物は確認できなかった。

調査では２面の生活面とそれに伴う整地の状況が明らかにされた。まず地山に排土を盛り生活面を築き、その後に整地を新たに行い既存の建物を建てていたと考えられる。いずれも出土遺物は明治期以降のもので、調査地の開発が明治以降に行われたことが確認された。　　（上野）

2000－６区の調査

本調査を実施したのは貝塚市南町1195－4である。

調査は調査地中央に、東西方向、1.5×7.3mの調査区を設定し実施した。調査区内には７層の土層が堆積していた。上から黄灰色細砂（第１層、層厚0.2～0.3m）、灰色細砂混粘質土（第２層、層厚0.1～0.2m）、灰黄色細砂（第３層、層厚0.1～0.2m）、黄褐色砂礫混細砂（第４層、層厚0.3m）、にぶい黄色細砂～中砂（第５層、層厚0.3m）、青灰色粘土（第６層、層厚0.1m）、褐灰色細砂（第７層、層厚0.1～0.2m）である。地山はにぶい黄橙色細砂で、現地表面より約１ｍで検出した。

第２層、第６層は粘質で固く締まった土間層である。第６層の上には礎石を確認した。その他の層は整地層である。第３、４、５層は大きく３層に分類したが、水平堆積ではなく、５－４－３層の順に入れた一括の整地層である。

生活面としては、２層上面、６層上面、地山上面が考えられる。第６層の直下から江戸期の土

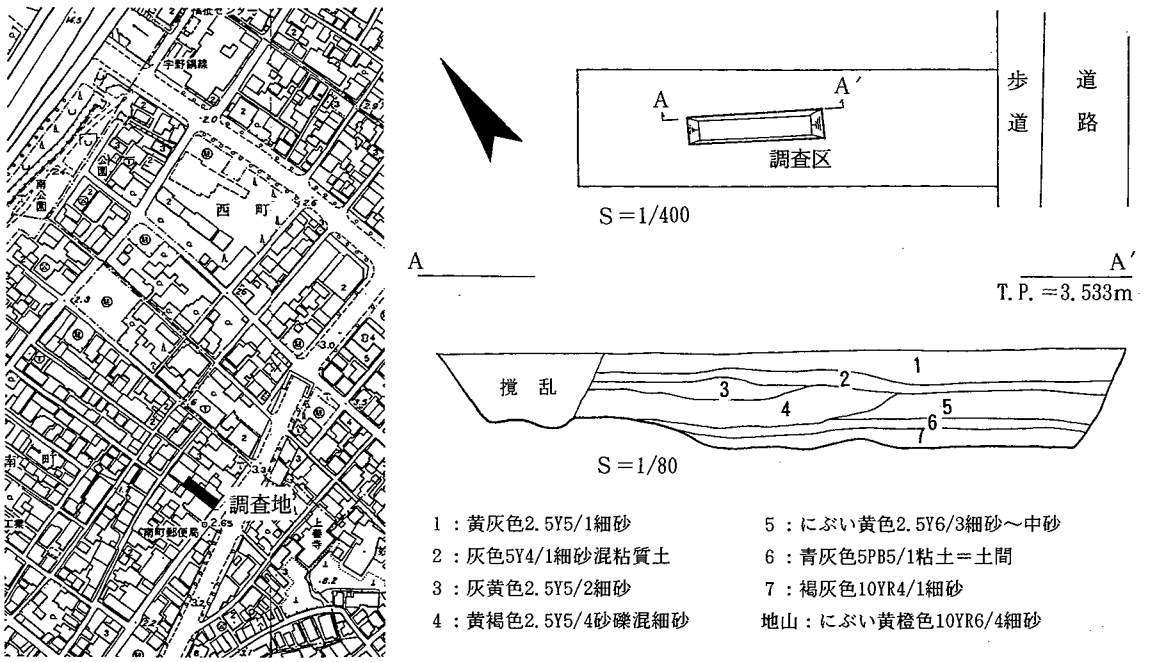


図７　2000－６区

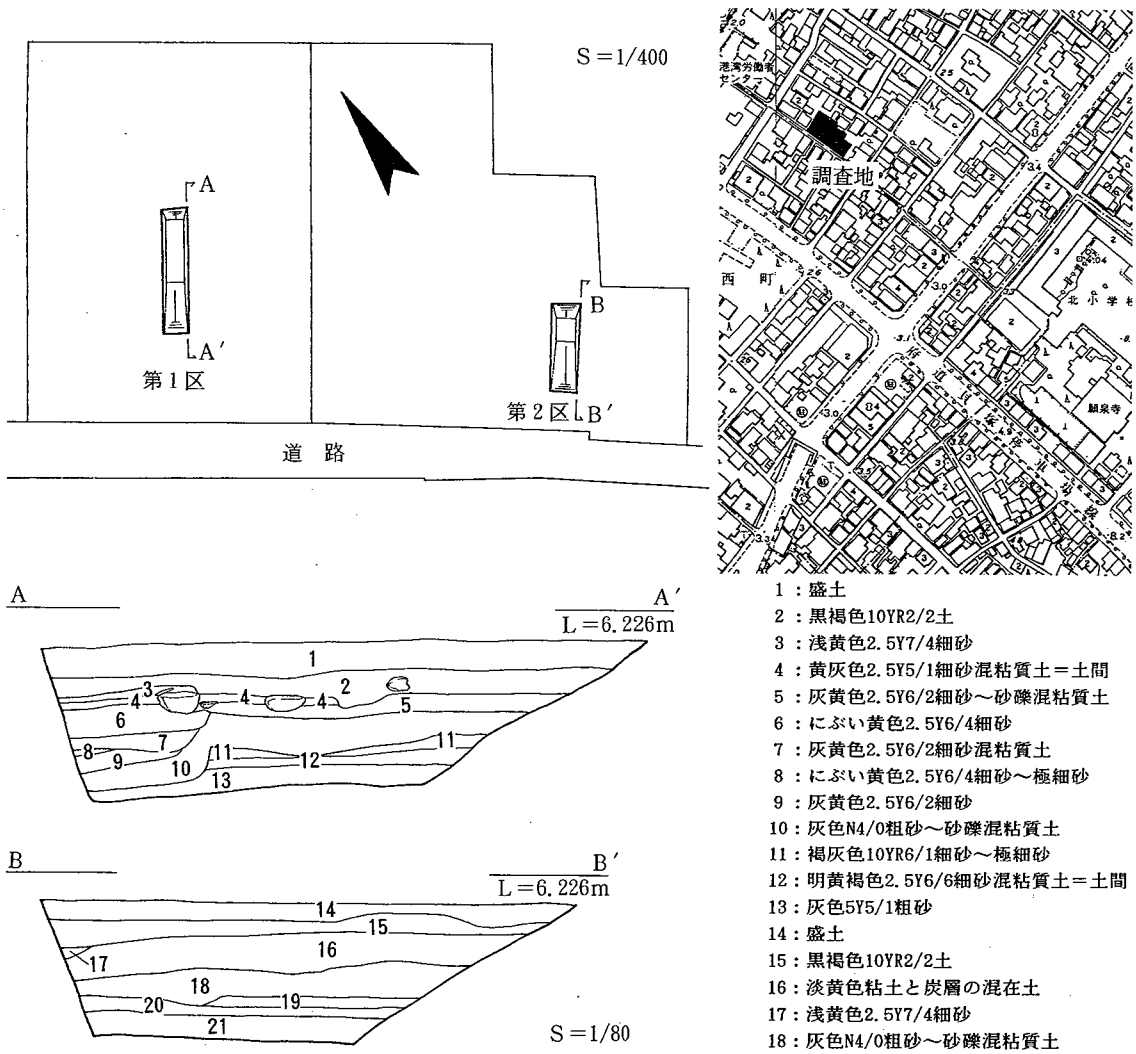
師器皿が出土していること、直上の第５層から18世紀代の青磁染付筒形碗が出土していること等の理由により、第６層は江戸時代の建物と考えられる。第２層は直上の第１層から近代の瓦片や陶磁器類が出土していることから、調査地内の前建物に伴うものである。地山上面からは遺構等は検出できなかったが、周囲の状況や紀州街道に面した立地から宅地であった可能性は高い。遺物は１層より瓦、陶器、５層より青磁染付筒形碗、７層より土師器皿が出土した。　　（上野）

2000－16区の調査

本調査を実施したのは貝塚市北町503、504、507である。

調査は調査地東側と西側隣地の中央に、それぞれ南北方向、1.5×5.7m、1.3×6.4mの調査区を設定し実施した。調査区は前者を第１区、後者を第２区とした。

調査区内は盛土（第１層、層厚0.2～0.3m）、既設建物解体土（第２層、層厚0.1～0.3m）の下に２面の生活面（第１区：第３層、第６層、層厚約0.1～0.4m、第２区：第４層、第12層、層厚約 0.1m）と、それに伴う整地層（第１区：第５層、第７～８層、層厚約 0.2～0.35m、第２区：第５～11層、第13層、層厚0.2～0.8m）が堆積する。地山はにぶい黄色細砂で、現地表面より



1：盛土
2：黒褐色10YR2/2土
3：浅黄色2.5Y7/4細砂
4：黄灰色2.5Y5/1細砂混粘質土＝土間
5：灰黄色2.5Y6/2細砂～砂礫混粘質土
6：にぶい黄色2.5Y6/4細砂
7：灰黄色2.5Y6/2細砂混粘質土
8：にぶい黄色2.5Y6/4細砂～極細砂
9：灰黄色2.5Y6/2細砂
10：灰色N4/0粗砂～砂礫混粘質土
11：褐灰色10YR6/1細砂～極細砂
12：明黄褐色2.5Y6/6細砂混粘質土＝土間
13：灰色5Y5/1粗砂
14：盛土
15：黒褐色10YR2/2土
16：淡黄色粘土と炭層の混在土
17：浅黄色2.5Y7/4細砂
18：灰色N4/0粗砂～砂礫混粘質土
19：灰褐色10YR6/2細砂混粘質土
20：にぶい黄色2.5Y6/4砂礫混細砂
21：にぶい黄色2.5Y6/4粗砂～砂礫
地山：にぶい黄色2.5Y6/3細砂

図８　2000－16区

1.5～1.7mで検出した。

第1区、第2区ともに、第1面の生活面は表土直下で検出した。いずれも既設建物に伴う生活面と考えられる。第1区・第3層は炭、煉瓦片を含み、明治以降の火災層と考えられる。第1区の既設建物は昭和初期に建てられたものである。第2区・第4層上面では礎石を検出した。礎石はほぼ現道路と直交する方向である。第2区の既設建物は大正頃建てられたものである。上面から瓦数点が出土した。なお、第1区から第2区の間には約 150年前に建てられた建物があった。したがって、第1面は概ね幕末～昭和初期の生活面と考えられる。

第1面と第2面の間には0.2～0.8mの厚い整地層が堆積する。第1区、第2区ともに類似した土であり、同時期の整地層と考えられる。

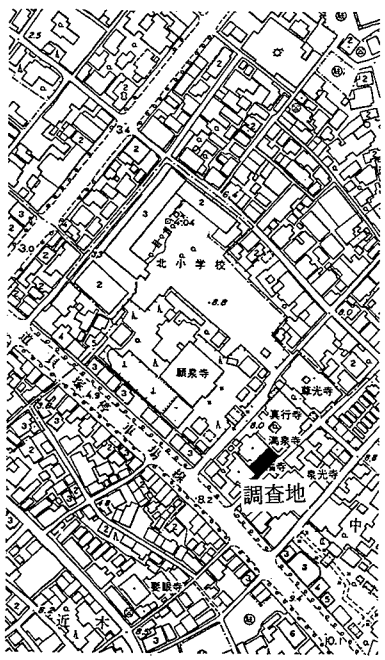
第2面については、出土遺物がなく、時期不明である。しかし、幕末の面より下層にあることから、確実に江戸期にさかのぼるものであろう。第2面に伴うものとして、地山上面より層厚0.2～0.4mの整地が行われている。周囲の建物との関係や地盤の脆弱さなど、何らかの理由で整地が必要であったと思われる。（上野）

2000－17区の調査

本調査を実施したのは貝塚市中844である。

開発計画に基づき1.5m×7.5mの調査区を設定して実施した。層序は盛土（0.4m）、一部分で褐色粗砂混じり細砂層（0.2m）で灰白色土の地山となる。

遺構は、北隅で直径1.1mの廃棄土坑、中央部で0.9m×0.9mの方形井戸を検出した。遺物は土坑から近世後半の陶磁器、瓦が出土し、井戸の埋め戻し砂から、瓦が出土している。このことにより、本調査地は近世後半以降の開発時に上面を削平して整地を行い建物を建てていることがわかった。



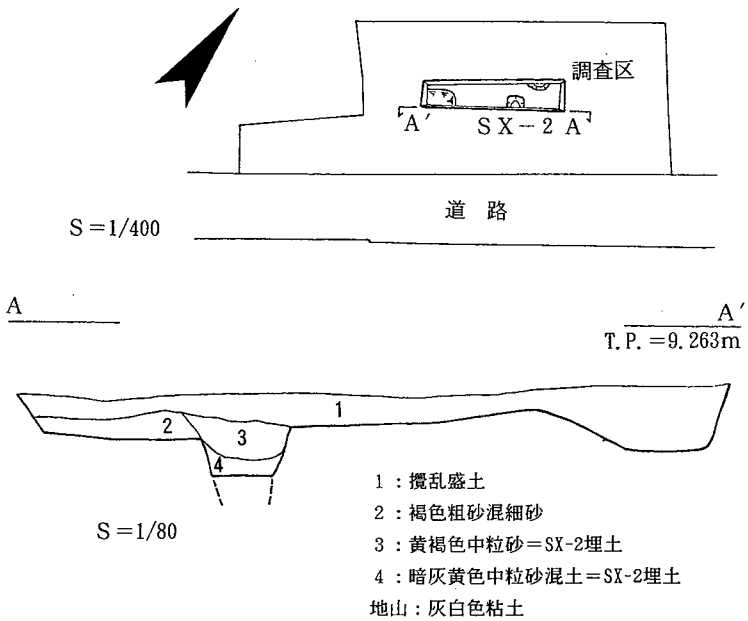


図9　2000－17区

また、撹乱土からは、銅銭２枚、椀形滓が出土しており、特に椀形滓は鍛冶作業に伴って出た鉄滓であり、周辺部分に鍛冶工房があったことが考えられる。　（三浦）

2000－31区の調査

本調査を実施したのは貝塚市中字感田1546-5である。

調査は開発予定地西側に1.8×４m、南北方向の調査区を設けて行った。調査地には７層の土層が堆積していた。上から現代整地土（第１層、層厚0.2m）、褐灰色砂質土（第２層、層厚0.06～0.08m）、緑灰色粘質土（第３層、層厚0.05m）、灰黄色砂礫混土（第４層、層厚0.05m）、地山ブロック含黄褐色砂礫混土（第５層、層厚0.05～0.08m）、灰黄褐色砂礫混土（第６層、層厚0.06～0.15m）、暗灰色砂質土（第７層、層厚0.06～0.08m）である。地山は黄色砂礫で現状地盤より－0.5 mにて検出した。周辺では地山面に粘土層が堆積しているが、調査地では砂礫層が露出し、全体が大きく粘土採掘のため削平を受けている。地山上面にて土坑２基を検出した。土坑はＳＫ－１が幅0.6m、長さ0.8m、深さ0.05～0.2m、ＳＫ－２が幅0.2m、長さ 0.6m、深さ0.05mを測る。暗灰色土、灰黄褐色粘質土、地山粘土ブロックの混在土を埋土とし、下面は凹凸があるため、粘土採掘の一部と考えられる。ＳＫ－１より土師質土器１点が出土した。

第７層は下面に踏み込み痕が認められ、耕作土である。その後、第６層により整地が行われ、第３～５層で宅地化する。第３層は土間である。遺物は出土していないが、周辺では、調査によって19世紀代に宅地化が進んでいることがわかっているため、同じ時期のものと思われる。第１、２層は現代の宅地に伴う整地土である。　（上野）

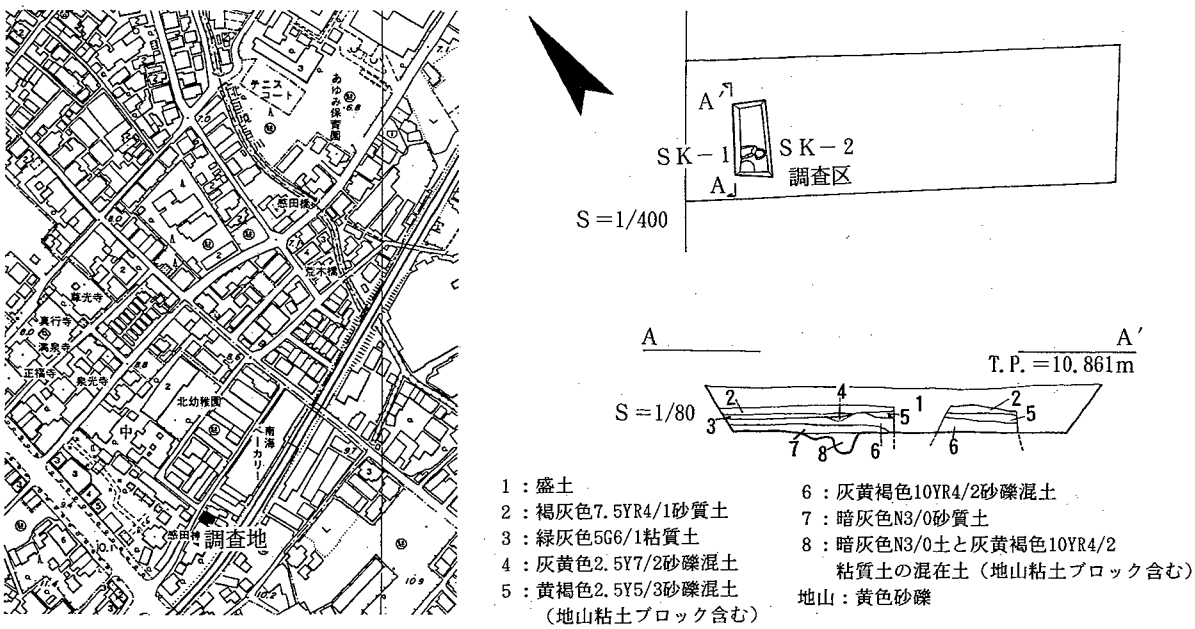


図10　2000－31区

2000－34区の調査

本調査を実施したのは貝塚市南町1142－３である。

調査は開発地駐車場部分に1.6m×１mの規模の調査区を設定し、深さ約1.3mまで掘削を行った。層序は上層から、撹乱・盛土（0.6m）、にぶい黄色粘土ブロックまじり土（第２層）、浅黄

色砂（第３層）、にぶい黄色粘土ブロックまじり土（第４層）、黄色砂（第５層）で地山まで掘削することはできなかった。

遺構は掘削面積が狭いため検出できなかったが、第２層、第５層は黄色粘土ブロックを含む整地層と考えられ、地盤が砂地であるために整地を行ったことがわかる。遺物は、18世紀後半～幕末・明治にかけての陶磁器、瓦、レンガが出土した。

今回の調査では、出土遺物から少なくとも18世紀後半には整地を行っていることが明らかとなった。（三浦）

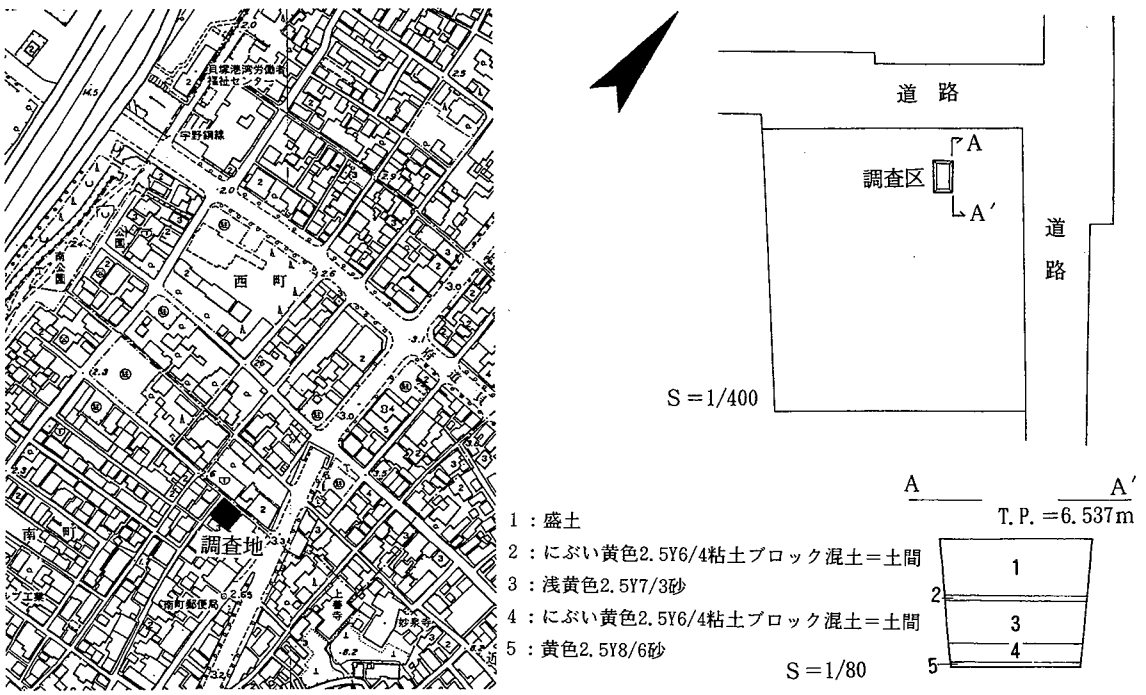


図11　2000－34区

2000－41区の調査

本調査を実施したのは貝塚市南町1354－８である。

調査は開発予定地に 3.5×17mの調査区を設けて行った。調査区には既設建物解体土の下に５層の土層が堆積していた。上から暗灰黄色砂礫混細砂（第２層、層厚 0.1m）、明黄褐色粘質土（第３層、層厚0.05m）、黄灰色細砂（第４層、層厚0.1m）、明黄褐色粘質土（第５層、層厚0.05m）、褐灰色細砂（第６層、層厚0.1～0.2m）である。

第３層と第５層は土間層である。第２層、第４層、第６層は整地層である。第６層は第５層土間に伴う整地層で固く叩き締められている。第４層は第３層土間に伴う整地層である。遺構は第６層上面より掘り込まれた、幅0.9m、深さ0.3mを測る溝状遺構を確認した。遺物は第６層より18世紀中頃～後半の肥前系染付、肥前系青磁、銭貨、第４層から19世紀の肥前系染付が出土した。以上のことから調査地は18世紀中頃～後半に宅地化され、19世紀代から現代にかけて宅地となっていたことが判明した。また土間層は調査区北東側にのみ堆積し、整地層も北東側の方がよく締まっていることから建物は北東に建てられ、南西側は庭であったと考えられる。（上野）

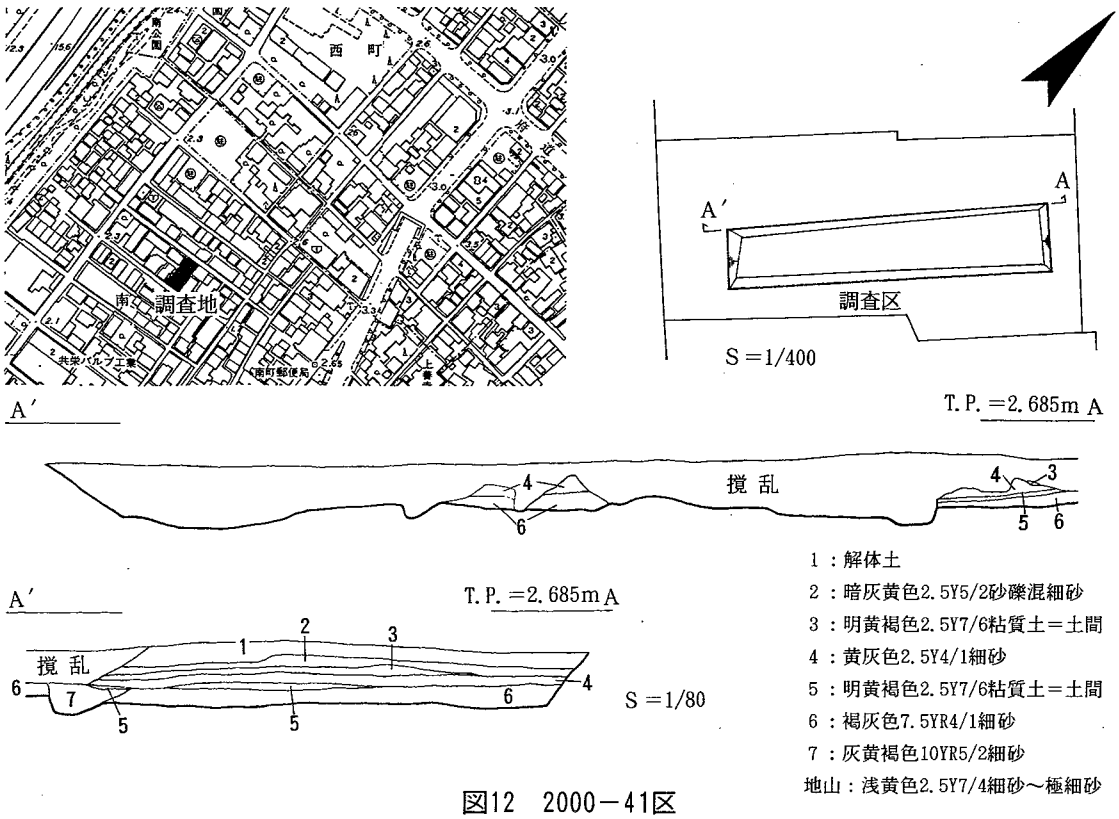


図12　2000－41区

2000－46区の調査

本調査を実施したのは貝塚市西町659－７である。

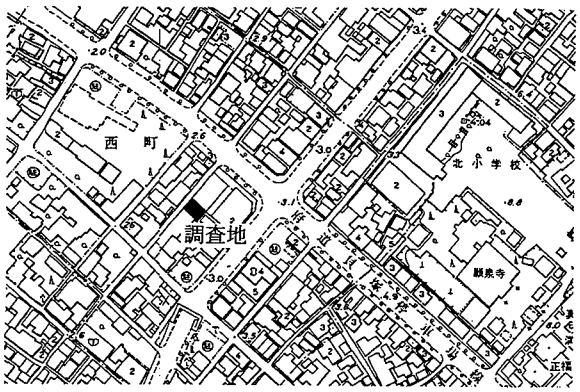
調査は建物建設予定地に 1.5×９mの調査区を設定して行った。調査区は層厚0.2～0.3mの既設建物解体土を取り除くと、土間層、整地層（層厚0.05～0.15m）が約20層重なって堆積し、各整地層から陶磁器、土師皿、瓦等が出土した。

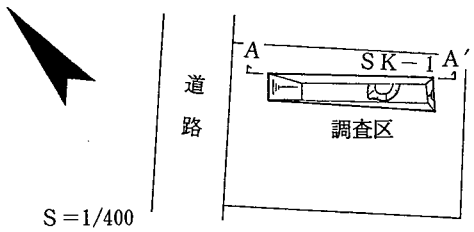
断面観察により最低９面の生活面を確認した。第１面（第２、3、17層上面）、第２面（第４層上面）、第３面（第５、6、18層上面）、第４面（第７、19層上面）、第５面（第８、3、20層上面）、第６面（第10～13層上面）、第７面（第14層上面）、第８面（第31層上面）、第９面（地山上面上面）である。地山はにぶい黄色細砂～極細砂で、現状地盤より約1.4mで検出した。

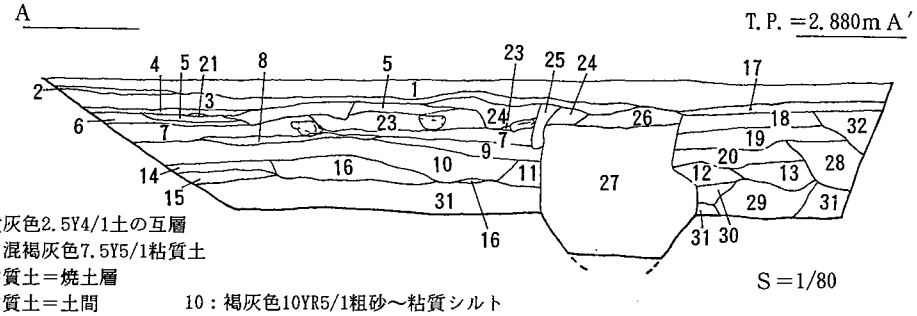
第１面は既設建物の土蔵土間層である。以下の面は出土遺物により第２～５面が19世紀代、第６面が18世紀後半、第７～９面が18世紀以前の年代が与えられる。

各生活面では断面観察により、第３面で土坑４基、第４面で土坑１基、建物礎石、第５面で土坑１基、第７面で土坑１基、第８面で土坑１基を確認した。これらの土坑はいずれも廃棄土坑と考えられる。

特に第３面で検出した土坑（ＳＫ－１）は幅約1.7mを測る円形で、深さは1.5mで地山上面まで達していた。埋土の中から大量の瓦、漆喰片等が出土し、建物等を解体した後の廃棄土坑であると考えられる。また、第１、３、４、７面では焼土層（第４、５、７、14層）が堆積する。焼土層は火災によるものと考えられ、調査地では火災等が度々発生して建物が焼失したことが判明した。また、建物消失後は整地を繰り返して生活面を築いていた。　（上野）







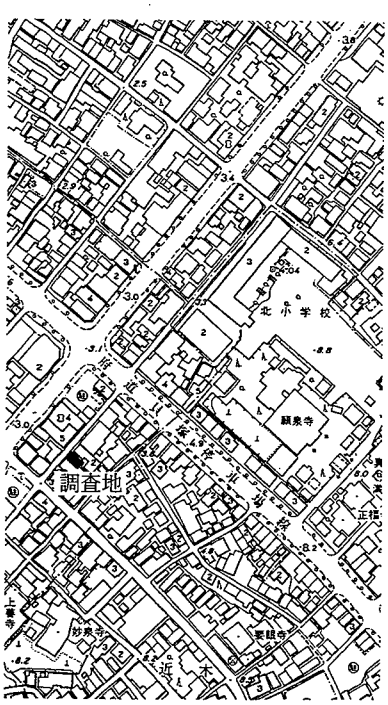
1：解体土
2：紫黒色5RP3/1粘質土
3：灰黄色2.5Y6/2粘質土と黄灰色2.5Y4/1土の互層
4：黄色2.5Y8/6粘土ブロック混褐灰色7.5Y5/1粘質土
5：暗赤灰色7.5R3/1細砂混粘質土＝焼土層
6：明黄褐色2.5Y7/6砂礫混粘質土＝土間
7：極暗赤褐色10R2/2粘質土＝焼土層
8：浅黄色2.5Y7/4細砂～シルト＝土間
9：灰黄褐色10YR4/2砂礫混細砂～粘質土＝土間
10：褐灰色10YR5/1粗砂～粘質シルト
11：浅黄色2.5Y7/3細砂～極細砂
12：褐灰色7.5Y5/1砂礫混細砂～極細砂
13：浅黄色2.5Y7/4細砂～極細砂
14：暗赤灰色10R4/1細砂混粘質土＝焼土層
15：灰黄褐色10YR6/2細砂
地山：にぶい黄色2.5Y6/4細砂～極細砂

図13　2000－46区

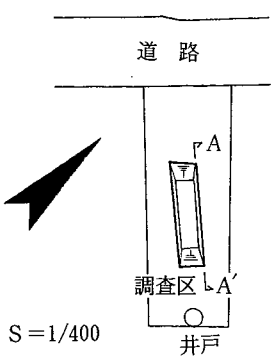
2000－48区の調査

本調査を実施したのは貝塚市西町729である。

調査は建物建設予定地に、1.2×5.5mの調査区を設定して実施した。調査区内には既設建物解体土の下に12層の土層が堆積していた。上から順ににぶい黄橙色粘質土（第２層、層厚0.1～0.2



1：解体土
2：にぶい黄橙色10YR6/3粘質土＝土間
3：淡黄色2.5Y8/3細砂～極細砂
4：明黄褐色2.5Y7/6粘土ブロック混
　にぶい黄色2.5Y6/3粘質土
5：灰色N5/0砂礫混粘質土＝土間
6：黄色2.5Y8/6細砂～極細砂
7：褐灰色5YR4/1砂礫混粘質土
8：暗紫灰色5P3/1砂礫混粘質土
9：青灰色5PB5/1粘質土＝土間
10：灰赤色10R4/2粘質土＝焼土層
11：紫黒色5P2/1粘質土＝土間
12：暗赤灰色10R4/1極細砂
13：赤黒色10R2/1粘質土＝土間



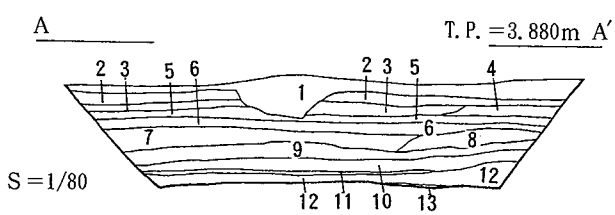


図14　2000－48区

m)、淡黄色細砂～極細砂(第３層、層厚0.1m)、明黄褐色粘土ブロック混にぶい黄色粘質土（第４層、層厚0.1m)、灰色砂礫混粘質土（第５層、層厚0.05～0.1m)、黄色細砂～極細砂（第６層、層厚0.1m)、褐灰色砂礫混粘質土（第７層、層厚0.1～0.2m)、暗紫灰色砂礫混粘質土（第８層、層厚0.1～0.2m)、青灰色粘質土（第９層、層厚0.1～0.15m)、灰赤色粘質土（第10層、層厚0.1～0.15m)、紫黒色粘質土（第11層、層厚0.04m)、暗赤灰色極細砂（第12層、層厚0.1～0.2m)、赤黒色粘質土（第13層、層厚0.04m）である。第２・５・９・11・13層は土間層、第３・４・６・７・８・10・12層は整地層である。生活面は各土間層上面で確認した。

遺物は第６層より肥前系磁器、第10層より瓦、肥前系磁器、第12層より陶器、瓦が出土した。

第２層は既設建物に伴う層である。出土遺物により第３～10層までが19世紀、第11層以下は18世紀後半以前であると考えられる。

地山は明黄褐色細砂～極細砂で、現地表面より約1.1mで検出した。　　（上野）

Ⅱ　沢 城 跡

沢城跡は近木川左岸の中位段丘上に位置する。南海電鉄二色の浜駅北側一帯の南北 500m、東西420mが遺跡の範囲である。沢城は「浜の古城」と呼ばれ、天正13年(1585）の豊臣秀吉による根来攻めの際、雑賀衆6000人が立て籠もったとされる。

従来の発掘調査では奈良時代から中世、近世にかけての遺構、特に13～15世紀にかけての掘立柱建物数棟を検出し、沢村の集落域が広がっていたことが判明した。また、沢城は沢村を濠により取り囲んで城としていたらしく、調査では南東側と南西側の濠を検出している。

1999－69区の調査

本調査を実施したのは貝塚市沢659－１、－２の一部である。

工事計画に基づき浄化槽部分の調査を行った。基本層序は第１層：盛土（層厚0.5m)、第２層

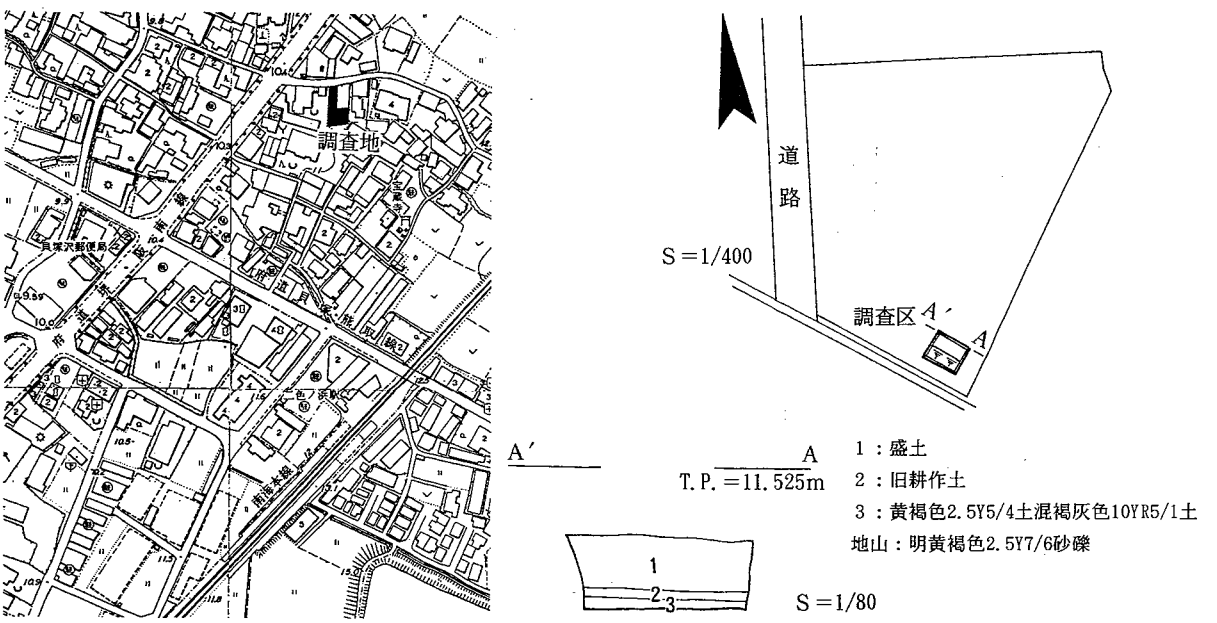


図15　1999－69区

：灰色土の旧耕作土（層厚0.1m）、第３層：褐灰色土に黄褐色土が混じる（層厚0.1m）で、地山は明黄褐色砂礫土と灰白色砂礫土である。

第２層は旧耕作土であり、申請地隣地の畑とほぼ同じ高さである。第３層は近世の耕作土層と考えられる。遺物は出土していない。地山上面で一部検出作業を行ったが遺構はなかった。近世期に土地の削平が行われたと考えられる。（木嶋）

2000－25区の調査

本調査を実施したのは貝塚市浦田134である。

調査は調査地中央に南北方向、２×11.5mの調査区を設定して行った。

調査地には盛土（第１層：層厚0.3～0.4m）、褐灰色土（第２層：層厚0.05～0.1m）が堆積していた。地山は灰白色粘土で、現状地盤より0.4～0.45mで検出した。

地山上面では溝状遺構１（ＳＤ－１）、土坑１（ＳＫ－２）を検出した。

ＳＤ－１は幅約 3.5mを測り、方向は北より約45°西へ振っている。深さは0.1～0.2mで、埋土は黒褐色砂礫混粘質土、灰黄褐色粘土である。遺物は瓦、瓦器、土師器が出土した。中世以降のものと考えられる。

ＳＫ－２は調査区外に広がるが、南北１m、東西 1.4mを検出した。平面形は隅丸方形に復元できる。深さは約 0.2mで、埋土は上層が明黄褐色細砂、下層が暗紫灰色砂礫混粘質土である。遺物は瓦、瓦器、肥前系磁器が出土した。18Ｃ中頃のものである。

調査地東側の宝蔵寺では、寺院小堂建て替えに伴う発掘調査で、沢城の濠跡と考えられる溝を検出している。今回の調査区は近接した位置にあり、濠跡を検出することが期待された。調査で

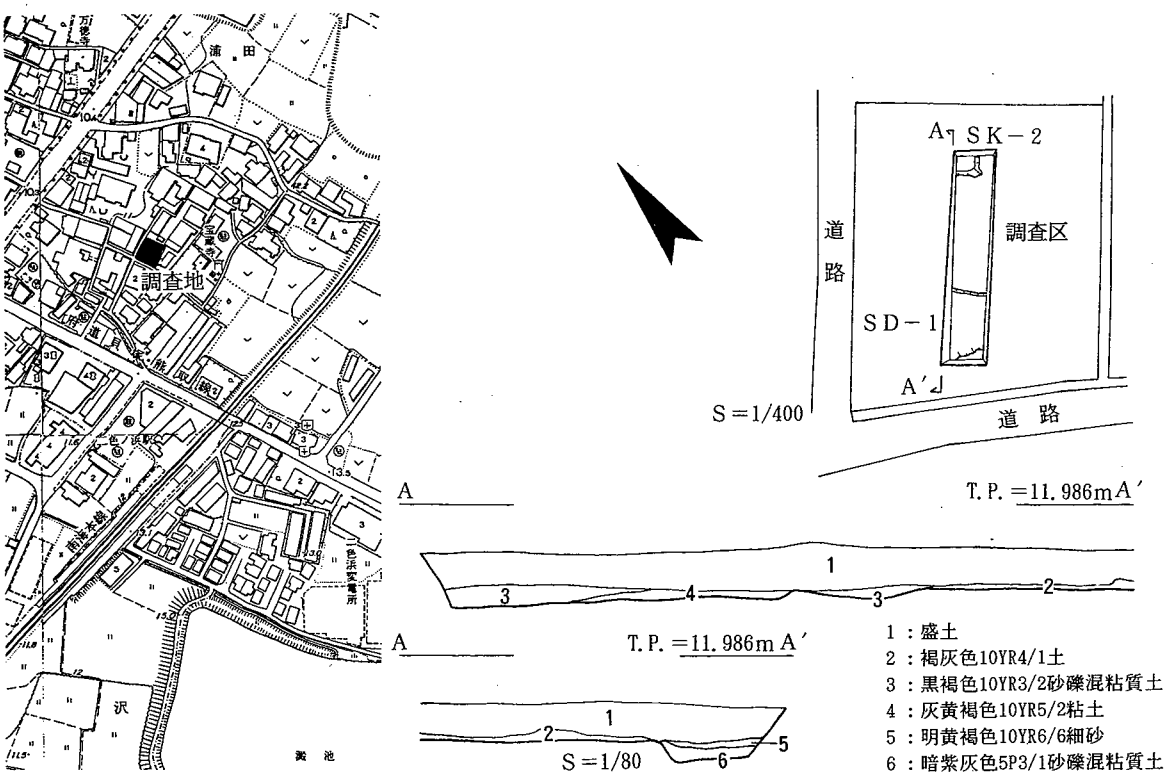


図16　2000－25区

はＳＤ－１がそれに続くものと考えられたが、規模、方向等若干異なり、濠とは別の浅い溝、もしくは粘土採掘坑等であると考えられる。方向から考えて、宝蔵寺調査時の溝と同一の遺構は調査地より更に南側に検出されるものと考えられる。（上野）

Ⅲ　沢新開遺跡

沢新開遺跡は近木川河口部から約500m上流の左岸に位置している。近木川河口部の開発状況を把握できる重要な地点であり、平成４年度に新規登録した遺跡である。遺跡の範囲は南北150m、東西150mである。

2000－８区の調査

本調査を実施したのは貝塚市沢1046－1、３である。

調査は調査地北側に、南北方向、1.5×2.8mの調査区を設定し実施した。

調査区には、盛土（第１層、層厚0.3～0.4m）、現代耕土（第２層、層厚0.1～0.2m）の下に褐灰色土（第３層、層厚0.1～0.15m）、褐灰色砂礫混粘質土（第４層、層厚0.1～0.2m）の近世の耕作土が堆積している。その下は青灰色砂礫含中砂～細砂（第５層、層厚0.2m）、灰黄褐色粗砂（第６層、層厚0.2～0.3m）、黄灰色0.5～１㎝大の粗砂～砂礫（第７層、層厚0.1m）、灰黄褐色拳大の礫含粗砂～中砂（第８層、層厚 0.2m）が堆積している。現地表面より1.3～1.4mで、灰褐色拳大の礫含砂礫層を検出し、以下同層が続く。これらの砂及び砂礫層は近木川氾濫による流路堆積と考えられる。遺構、遺物は検出しなかった。

このような状況は調査地北側の沢市営住宅建設時の調査や99－62区の調査でも同様である。今回の調査により、一帯は近木川の影響を受け、近世まで耕作地の開発を受けなかったことが判明した。（上野）

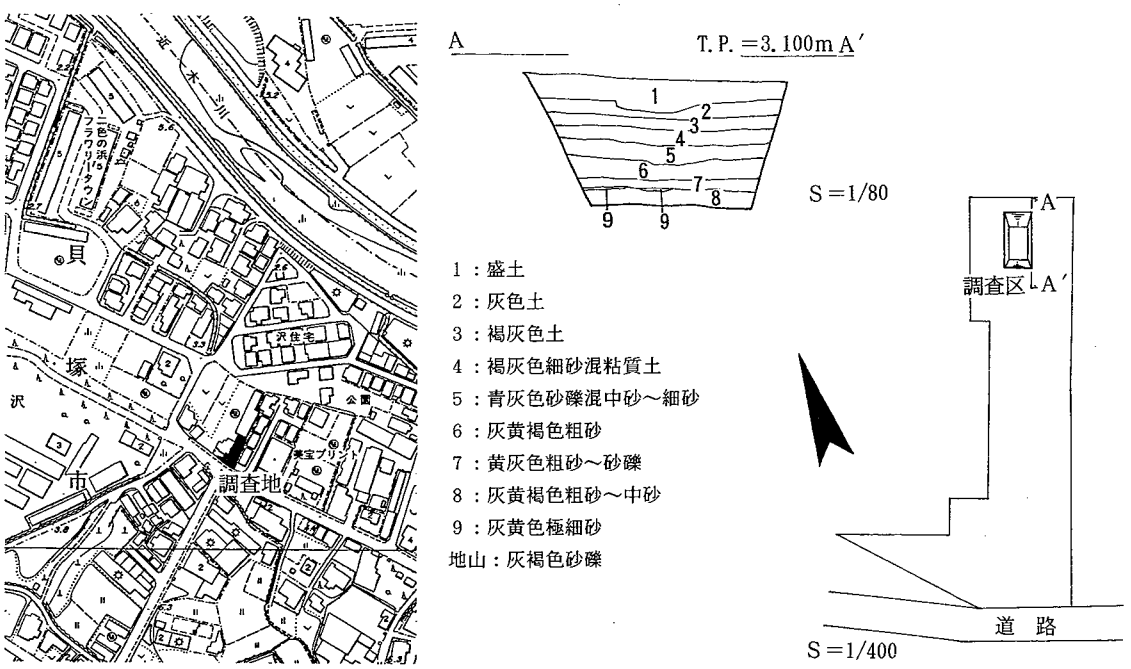


図17　2000－８区

Ⅳ 澱池遺跡

澱池遺跡は沢城跡と同じ近木川左岸の中位段丘上に位置する。南海電鉄二色の浜駅南東側一帯、澱池の周囲に広がり、南北350m、東西350mが遺跡の範囲である。

従来の発掘調査では13世紀代の掘立柱建物、井戸等を検出している。

また、1983年の調査では中世の耕作層から貨泉が出土し、平成11年9月に市指定文化財となっている。

2000－20区の調査

本調査を実施したのは貝塚市沢635－1、634－2である。

調査は調査地東側に、東西方向、1.5×6mの調査区と南北方向、1.5×6mの調査区を設定し、前者を第1区、後者を第2区として実施した。調査区内には既設駐車場のアスファルト（第1層、層厚0.05m）、駐車場造成盛土（第2層、層厚 0.7～0.75m）、現代耕土（第3層、層厚0.05m）が堆積している。第3層から肥前系白磁が出土した。現代耕土直下、現地表面より 0.8mで黄色粘土の地山を検出した。第2区は造成時の地盤改良により、盛土直下で地山となる。

地山上面で検出した遺構は埋土が現代耕土と異なるため、上層には中世～近世の耕作層が堆積していたと思われる。また、遺構深度は浅いものが多く、現代耕土堆積前に土取りが行われたと

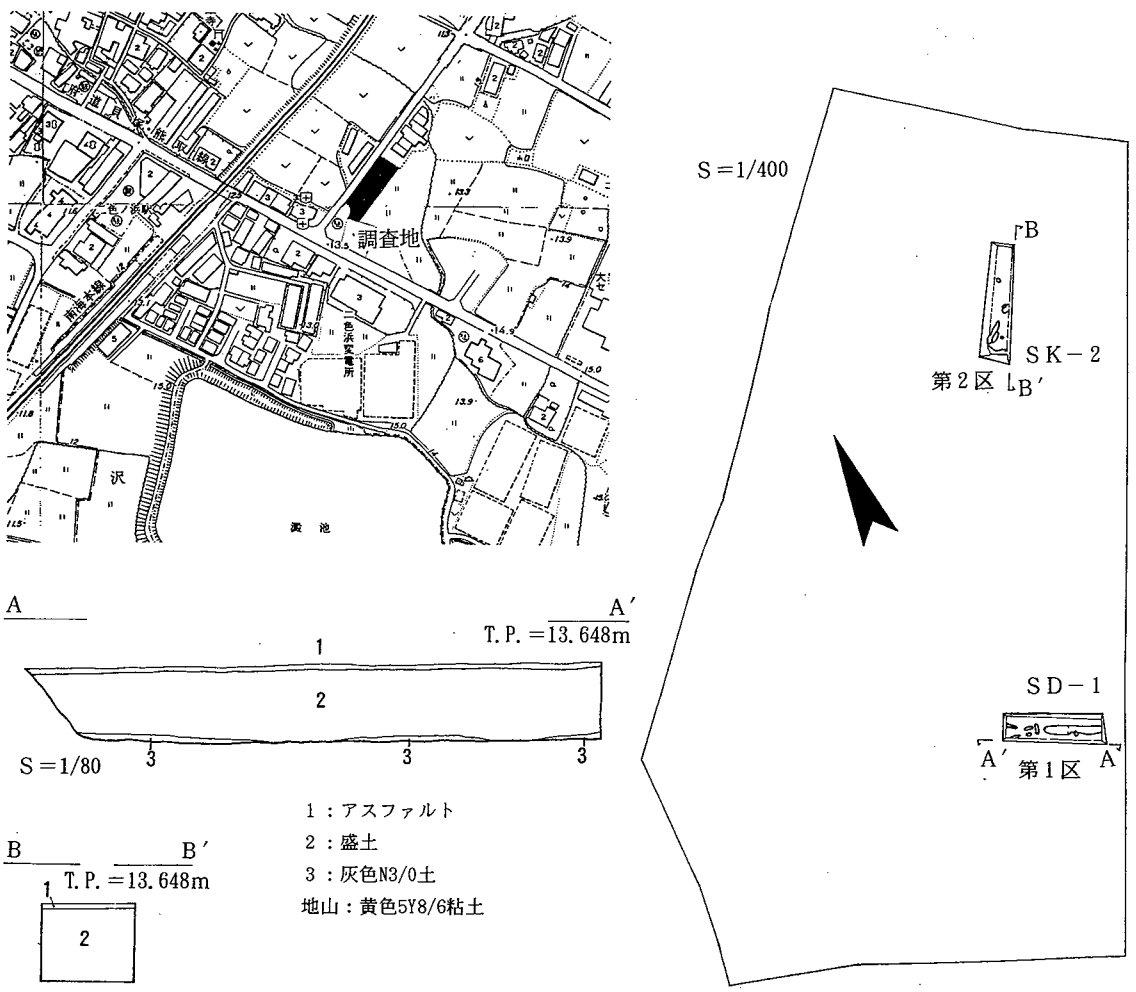


図18　2000－20区

考えられる。

第１区では溝１条、鋤溝数条を検出した。溝ＳＤ－１は南東～北西方向の溝で、幅0.4～0.5m、検出長３m、深さ0.05～0.1 mを測る。埋土は暗赤灰色粘質土である。鋤溝は南東～北西方向のものと、これに直交するものがある。埋土は灰色土である。

第２区では土坑１基、溝２条、鋤溝を検出した。土坑ＳＫ－２は不整形で、埋土は褐灰色土に地山の黄色粘土ブロックを含む。深さは0.05～0.1 mである。その形状から粘土採掘坑の可能性がある。溝ＳＤ－３とＳＤ－４は北東～南西方向の溝で、幅約0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色土である。埋土、方向、形状が類似しており、同一遺構である可能性が高い。鋤溝はＳＤ－３、ＳＤ－４に平行し、埋土も同じである。

第１区、第２区の鋤溝、ＳＤ－３、ＳＤ－４の埋土はいずれも類似し、同じ時期のものである。ＳＤ－３より瓦器、土師器が出土しており、中世の耕作に関係する遺構である。ＳＤ－１は他と埋土が異なり、周辺の調査事例と比較して、中世以前の遺構である可能性が高い。　　（上野）

Ｖ　土生遺跡

土生遺跡は津田川右岸に位置する。国道26号線とＪＲ阪和線の間にあり、岸和田市と貝塚市にまたがる南北600m、東西550mが遺跡の範囲である。

従来の発掘調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構が中心で溝跡、流路跡等を検出している。集落の中心は岸和田市側にあると考えられ、平成８年度には集落域の南を限ると考えられる溝跡を検出している。

1999－61区の調査

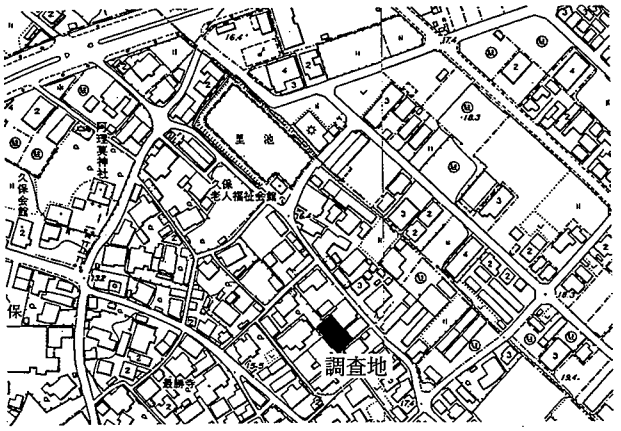
本調査を実施したのは貝塚市久保509－３の一部である。

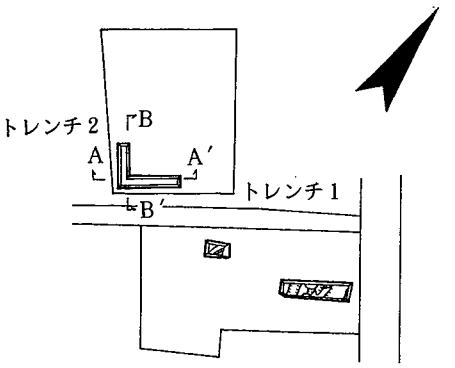
開発予定地105.58㎡に対して、申請建物部分についてトレンチ１（6.8㎡）、トレンチ２（４㎡）の調査区を設定した。

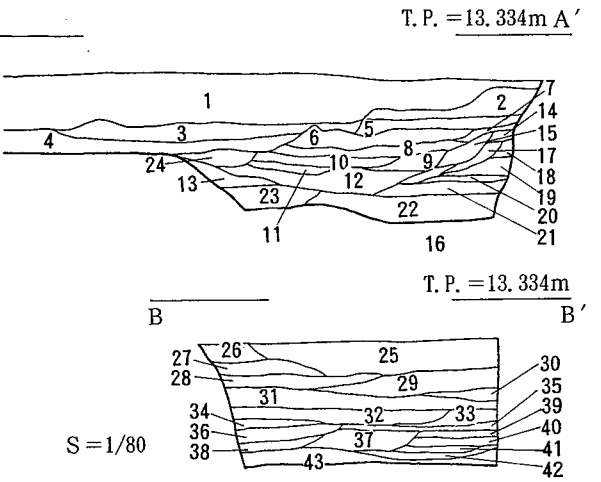
各調査区の基本層序は以下のとおりである。

トレンチ１は第１層：盛土、撹乱（層厚0.5m）、第２層：にぶい黄橙色土（層厚0.3m）、第３層：灰黄色粘質土（層厚0.2m）、第４層：灰黄褐色土（層厚0.1m）、第５層：灰色粗砂（層厚0.2m）＝溝埋土、第６層：褐灰色粘土（層厚0.3m）、第７層：褐灰色粗砂、粘土混じり（層厚0.4m）、第８層：褐灰色砂質土（層厚0.2m）、第９層：にぶい黄色シルト（層厚0.2m）、第10層：黄灰色粘土（層厚0.1m）、第11層：灰オリーブ色シルト（層厚0.3m）、第12層：黄褐色砂礫（地山）である。

トレンチ２は第１層：盛土、撹乱（層厚0.3～0.4m）、第２層：灰黄色土（層厚0.2m）、第３層：灰黄褐色土（層厚0.2m）、第４層：灰黄褐色粘質土（層厚0.2m）、第５層：褐灰色砂質土（層厚0.15m）、第６層：灰白色微砂（層厚0.04m）、第７層：黄灰色粗砂（層厚 0.2m）＝溝か、第８層：褐灰色粘土（層厚 0.3m）、第９層：灰黄色粗砂（層厚0.15m）、第10層：黄灰色粗砂（層厚0.3m）、第11層：黄褐色砂礫（地山）である。







1：盛土
2：にぶい黄橙色10YR7/2土
3：灰黄色2.5Y7/2土
4：灰黄褐色10YR5/2土
5：灰黄色2.5Y6/2粘質土
6：黄灰色2.5Y5/1粘質土
7：褐灰色7.5Y5/1粘質土
8：褐灰色2.5Y5/1粘土
9：黄灰色2.5Y4/1粘土
10：粘土混黄灰色2.5Y5/1粘質土
11：褐灰色10YR5/1粘土
12：褐灰色10YR6/1粗砂
13：灰色5Y5/1粘土
14：灰黄褐色10YR5/2粘質土
15：褐灰色10YR6/1砂質土
16：黄灰色2.5Y4/1粘質土
17：黄灰色2.5Y5/1粘土
18：灰色5Y6/1粘質土
19：にぶい黄色2.5Y6/3シルト
20：灰白色2.5Y7/1シルト
21：黄灰色2.5Y5/1粘土
22：灰オリーブ色5Y6/2シルト
23：灰色5Y5/1粗砂
24：灰色5Y6/1粗砂
25：盛土
26：盛土
27：灰黄色2.5Y7/2土
28：灰黄褐色10YR6/2粘質土
29：灰黄褐色10YR6/2土
30：灰黄褐色10YR6/2砂質土
31：灰黄褐色10YR6/2粘質土
32：褐灰色10YR6/1砂質土
33：灰色5Y6/1粘土
34：灰色5Y6/1粘土
35：灰白色2.5Y7/1微砂
36：にぶい黄色2.5Y6/3砂
37：黄灰色2.5Y6/1砂
38：灰黄褐色10YR6/2粘土
39：褐灰色10YR6/1粘土
40：灰黄褐色10YR5/2粘土
41：褐灰色10YR4/1粘土
42：褐灰色10YR5/1粘土
43：灰黄色2.5Y6/2粗砂
地山：黄褐色2.5Y5/3砂礫

図19　1999－61区

トレンチ1の基本層序を大きく分けると、第1層は盛土・撹乱、第2層は近世の耕作土、第3層は近世の耕作土、第4層は中世の遺物包含層（耕作土）、第5層は粗砂埋土の溝（中世か）、第6・7層は流路堆積、第6層は黒褐色の粘土の堆積であり、小型丸底壷（土師器片）が出土したことから、古墳時代の流路堆積と考えられる。第7層は粘土と砂（粗砂）が混じった堆積であり、弥生土器甕底部が出土した。第8層は第6・7層の粘りのある粘土の埋土とは異なり、粘りのない粘質土層である。遺物が出土した。第9層はシルト質堆積である。第10層は粒子が細かく粘りのある粘土層。第11層はシルト堆積であり、若干遺物を含むようである。第12層は粗砂堆積であり、自然流路と考えられる。第12層上部で遺物を若干含む。（木嶋）

Ⅵ　地蔵堂廃寺

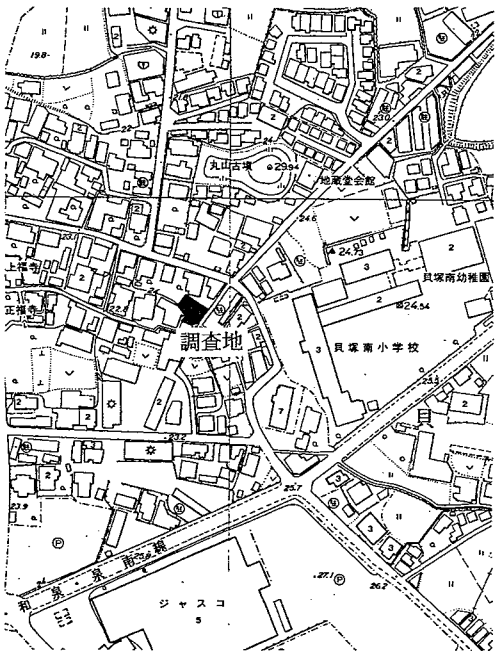
地蔵堂廃寺は近木川左岸の中位段丘上、標高22～23mを測る地点に位置する平安時代の寺院跡である。南北170m、東西220mが遺跡の範囲である。遺跡は地蔵堂遺跡に包括される。北東には市域唯一の前方後円墳で国指定史跡である地蔵堂丸山古墳が存在する。地蔵堂廃寺については現正福寺境内において金堂および塔の基壇を検出している。また、地蔵堂丸山古墳南東の小学校敷地内において、計4基の埋没古墳を検出しているほか、中世の溝、掘立柱建物、土坑等も検出している。

1999－66区の調査

本調査を実施したのは貝塚市地蔵堂251の一部である。

調査は工事計画に基づき申請建物部分について40㎡の調査区を設定した。調査地の基本層序は第１層：解体表土（層厚0.05～0.1m）、第２層：にぶい橙色粘質土＝表土と地山の混じり（層厚0.05m）、第３層：明褐色粘土と灰白色粘土地山である。調査地はすでに削平されており、解体表土下より地山面を確認した。地山上面で遺構検出をおこなったが、遺構、遺物は確認できなかった。

（木嶋）



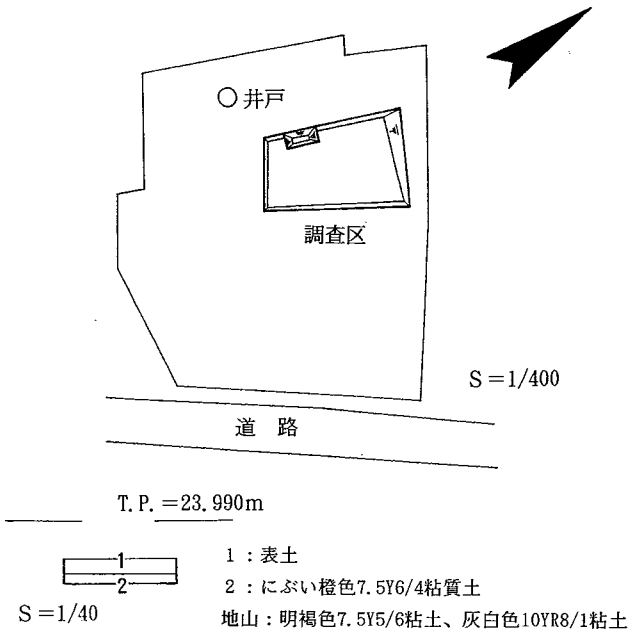


図20　1999－66区

Ⅶ　名越遺跡

名越遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高38～44mを測る地点に位置し、南北700m、東西800mが遺跡の範囲である。遺跡北西部で清児遺跡と接している。遺跡内は一部住宅地となっているが、大部分が市街化調整区域で現在も田畑が広がる。発掘調査では中世の耕作土、溝跡等を検出している。

2000－12区の調査

本調査を実施したのは貝塚市清児358－5、358－1である。

調査は建設予定部分中央に南北1.5m、東西６mの調査区を設定して行った。

調査区内には層厚1.2～1.3mの盛土（第１層）の下に、層厚0.15～0.2 mの褐灰色粘質土の耕作土（第２層）が堆積していた。土師器細片が出土し、中世～近世の層と考えられる。調査地に現代耕土は存在しない。盛土の際に除去されたのだろう。地山は明黄褐色粘質土で現地表面より約1.4mで検出した。

地山面にて溝１条（ＳＤ－１、ＳＤ－２）、鋤溝１条（ＳＤ－３）、土坑１基（ＳＫ－４）を検出した。ＳＤ－１、ＳＤ－２は本来、同じ溝であったと考えられる。検出幅0.3～0.6m、検出

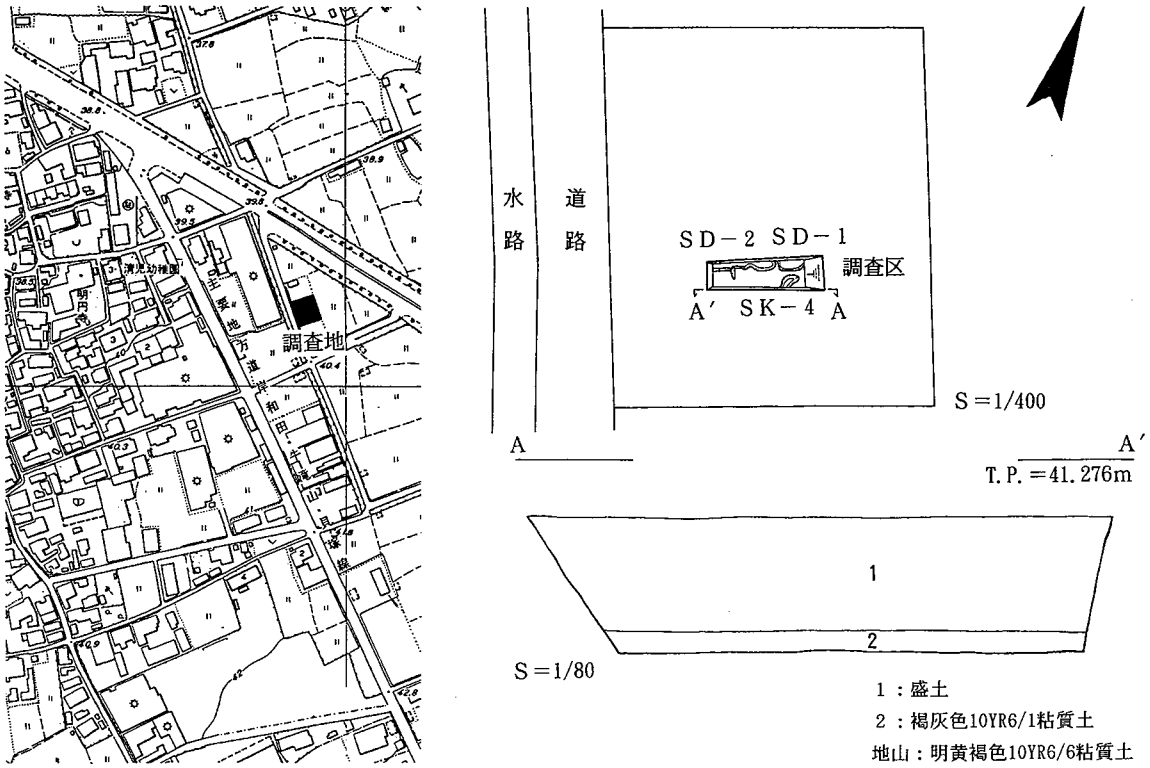


図21　2000－12区

長５ｍを測る東西方向の浅い溝である。南側肩部のみ検出した。深さは0.02～0.1 ｍで、底部は凹凸がある。上層の耕作により、上面は削平を受けたものと考えられる。遺物は土師器、須恵器杯が出土した。ＳＫ－４は幅0.4m、検出長0.9m、深さは0.05～0.1 ｍを測る。遺物は土師器、須恵器甕が出土した。ＳＤ－１、ＳＤ－２、ＳＫ－４の埋土は暗紫灰色粘質土である。時期は奈良時代である。ＳＤ－３は幅0.1m、長さ0.7mを測る南北方向の溝である。埋土は第２層で、上層の耕作に伴う耕作跡である。　（上野）

2000－22区の調査

本調査を実施したのは貝塚市名越207－２である。

調査は調査地北側に、東西方向、1.5×６ｍの調査区を設定し実施した。

調査区内には７層の土層が堆積していた。上から順に盛土（第１層、層厚0.4～0.55m）、現代耕土（第２層、層厚0.1～0.15m）、灰色シルト（第３層、層厚0.05～0.1m）、灰色細砂混シルト（第４層、層厚 0.1～0.2 ｍ）、紫灰色砂礫混粘質土（第５層、層厚0.15～0.2m）、紫灰色粘質土（第６層、層厚0.15～0.2m）、灰色極細砂～シルト（第７層、層厚0.05～0.1m）である。地山は黄色粘土で、現地表面より約1.2mで検出した。

各層はすべて水平堆積である。第３、４、７層は耕作土である。第３、４層は色、酸化の度合い等から分層したが、同一層と考えられる。第５、６層は土質等から耕作土とは考えにくく、かさ上げ等の整地土と考えられる。また土質の違いで２層に分層したが、第５、６層の境界は不明瞭で、おそらく時期差はなく同一時期による整地土の違いと考えられる。

遺物は第３層より焼土塊、第４層より土師器、第６層から瓦器、土師器が出土した。各層の時

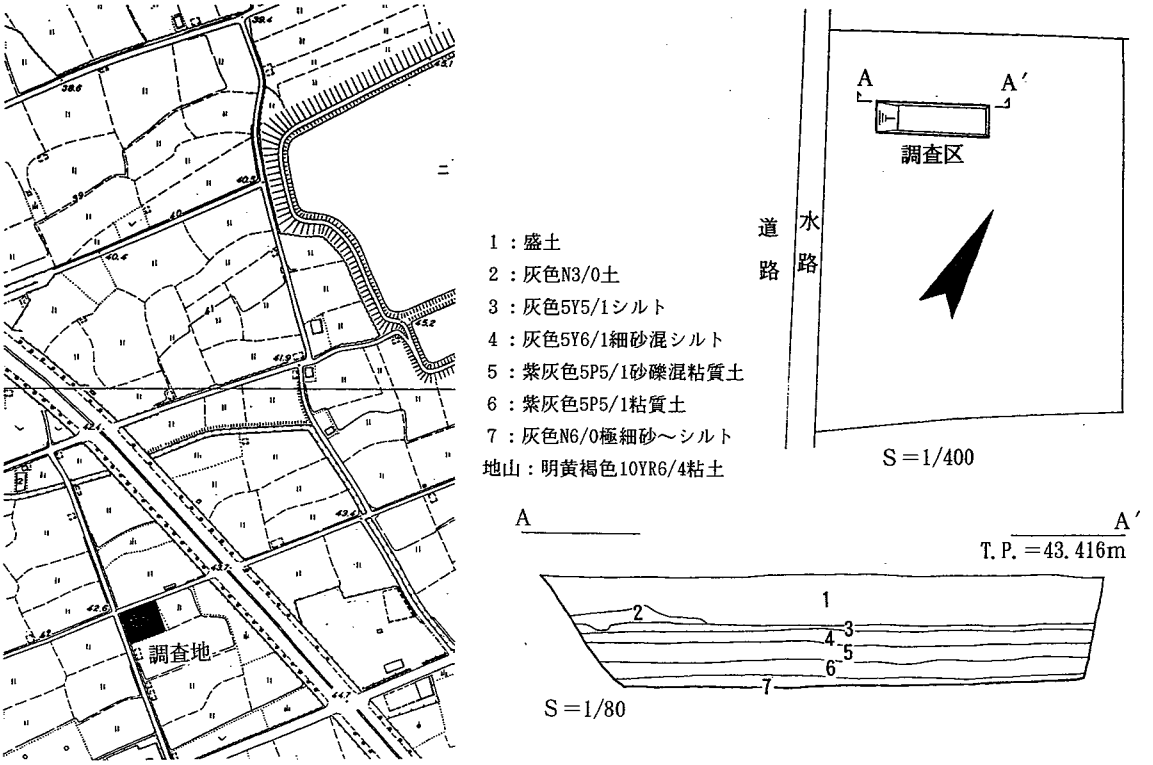


図22　2000－22区

期は第３、４層が中世～近世、第５、６層が中世、第７層が中世もしくはそれ以前と考えられる。

地山上面では踏み込み痕等は認められるものの、明確な遺構は認められなかった。

以上のことから、調査区では第７層の耕作後、中世の段階で土地のかさ上げを行っていることが判明した。かさ上げの理由については不明だが、調査区北側の99-1次調査で流路が発見されていることから、その影響を受けたものと思われる。その後、再び耕作が行われ、現在まで耕作地となっていた。（上野）

Ⅷ　清児遺跡

清児遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高32～38mを測る地点に位置し、南北700m、東西870mが遺跡の範囲である。遺跡南部で名越遺跡北西部と接している。遺跡内は一部住宅地となっているが、大部分が市街化調整区域となっており、現在も田畑が広がっている。

発掘調査では昭和62年度に府道貝塚中央線布設に伴う㈶大阪府埋蔵文化財協会（当時）が実施した調査で奈良～平安時代の掘立柱建物を検出している。また、中世耕作跡、溝跡等は遺跡全域に広がっている。

2000－47区の調査

本調査を実施したのは貝塚市麻生中750－１である。

浄化槽部分に調査区を設定した。地層の状況は0.85mの盛土、耕作土（0.２m）の下は遺物包含層である灰褐色土（0.15m）、淡緑灰色土（0.15m）である。地山（自然層）は暗灰褐色土である。遺物は弥生時代の石鏃１点が淡緑灰色土から出土している。遺物包含層を確認したが、含

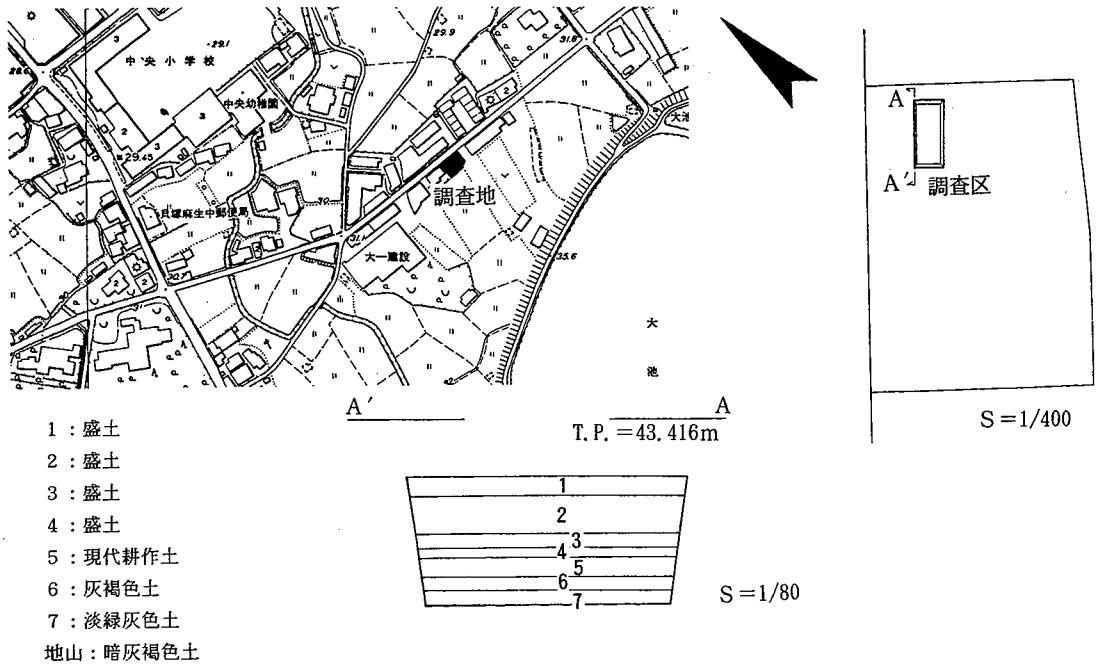


図23　2000－47区

まれる遺物は希薄であった。遺構は存在する可能性があるが、調査面積が狭く確認できなかった。

調査の結果、開発地には遺物包含層が存在し、遺構が存在する可能性もある。しかし、包含層及び遺構面が破壊される部分は今回確認調査を行った浄化槽部分のみであった。　（三浦）

Ⅸ　まとめ

平成12年は８遺跡18地点の調査を行ったが、いずれも従来の調査成果を覆すものではない。

貝塚寺内町遺跡では大まかに復元されつつある寺内の様相を裏付けた。また、ほとんどの調査区において土間を確認し、その中で宅地と庭地部分が推定できる地点があった。今後はこれらの成果を精緻に分析し、街路と宅地の関係等を考えて行く必要がある。

沢城跡、澱池遺跡は近世以降の土取り等の影響で遺構を確認できたものは少ない。しかし耕作土や遺物包含層を確認したため、中世の沢村を考える上で今後も調査を続ける必要があるだろう。

土生遺跡では弥生～古墳時代の流路跡を確認した。周辺の調査では同時代の流路跡、溝跡が存在し、津田川を背景にして北西側の微高地に広がる集落が想定できる。時に流れを変える津田川は集落に度々被害をもたらしただろうが、同時に豊かな実りをもたらす場合もあったであろう。

名越遺跡、清児遺跡では中世に大規模な開発を行い、耕地化した様子が確認できた。また、奈良時代の遺構を検出し、同時期の建物跡、溝跡を検出している周辺の調査例と合わせて、集落の存在が考えられる。

一方、沢新開遺跡、地蔵堂遺跡では遺構を確認できなかった。これらは河川の影響や土地の削平が原因と考えられる。

最後にこの報告書を作成するにあたり、尾越明美、西出安芸子、薮　知子、大鹿倫子、田中明美、義久幸子諸氏の参加、協力を得た。記して感謝します。　（上野）

報　告　書　抄　録

ふりがな	かいづかし　い　せきぐんはっくつちょうさがいよう
書名	貝塚市遺跡群発掘調査概要
副書名	
巻次	23
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 58 集
編著者名	上野　裕子、三浦　基、木嶋　崇晴
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１－17－１　TEL　0724（23）2151
発行年月日	西暦2001年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市中（おおさかふかいづかしなか）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 0214～15	4.2	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市南町（おおさかふかいづかしみなみまち）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 0417～18	10.95	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市北町（おおさかふかいづかしきたまち）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 0612～13	17	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市中（おおさかふかいづかしなか）	27208	20	34度27分	135度21分	2000 0612～13	11.25	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市中（おおさかふかいづかしなか）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 1012～13	7.2	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市南町（おおさかふかいづかしみなみまち）	27208	20	34度27分	135度21分	2000 1020～21	1.6	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市南町（おおさかふかいづかしみなみまち）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 1124～25	59.5	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市西町（おおさかふかいづかしにしまち）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 1213～14	13.5	個人住宅
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	大阪府貝塚市西町（おおさかふかいづかしにしまち）	27208	22	34度27分	135度21分	2000 1214～15	6.6	個人住宅
沢城跡（さわじょうあと）	大阪府貝塚市沢（おおさかふかいづかしさわ）	27208	24	34度26分	135度21分	2000 0301～02	3	個人住宅
沢城跡（さわじょうあと）	大阪府貝塚市浦田（おおさかふかいづかしうらだ）	27208	24	34度26分	135度21分	2000 0725～26	23	個人住宅
沢新開遺跡（さわしんかいいせき）	大阪府貝塚市沢（おおさかふかいづかしさわ）	27208	89	34度26分	135度21分	2000 0419～20	4.2	個人住宅
澱池遺跡（とどのいけいせき）	大阪府貝塚市沢（おおさかふかいづかしさわ）	27208	34	34度26分	135度21分	2000 0619～20	18	個人住宅

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
土生遺跡（はぶいせき）	大阪府貝塚市（おおさかふかいづかし）久保（くぼ）	27208	61	34度27分	135度23分	2000 0120～21	10.8	個人住宅
地蔵堂廃寺（じぞうどうはいじ）	大阪府貝塚市（おおさかふかいづかし）地蔵堂（じぞうどう）	27208	8	34度25分	135度21分	2000 0208～09	40	個人住宅
名越遺跡（なごせいせき）	大阪府貝塚市（おおさかふかいづかし）清児（せちご）	27208	71	34度25分	135度23分	2000 0511～12	9	個人住宅
名越遺跡（なごせいせき）	大阪府貝塚市（おおさかふかいづかし）名越（なごせ）	27208	71	34度25分	135度23分	2000 0705～06	9	個人住宅
清児遺跡（せちごいせき）	大阪府貝塚市（おおさかふかいづかし）麻生中（あそうなか）	27208	36	34度25分	135度21分	2000 1212～13	3.75	個人住宅

所収遺跡名（ふりがな）	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間	陶磁器、瓦、土師質土器	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間	陶磁器、土師器、瓦	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間		
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	土坑、井戸	陶磁器、瓦、銭貨、椀形滓	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	土坑	土師質土器	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間	陶磁器、瓦	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間	陶磁器、銭貨	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間	陶磁器、瓦、漆喰	
貝塚寺内町遺跡（かいづかじないちょういせき）	城郭寺院跡	近世	整地層、土間	陶磁器、瓦	
沢城跡（さわじょうあと）	城跡 集落跡	中世			
沢城跡（さわじょうあと）	城跡 集落跡	中世	溝、土坑	瓦器、土師器、瓦	
沢新開遺跡（さわしんかいいせき）	集落跡	近世			
澱池遺跡（とどのいけいせき）	集落跡	中世	鋤溝、土坑	瓦器、土師器、磁器	
土生遺跡（はぶいせき）	集落跡	弥生、古墳	流路跡	弥生土器、土師器	
地蔵堂廃寺（じぞうどうはいじ）	社寺跡	平安			
名越遺跡（なごせいせき）	散布地	中世	溝、土坑、鋤溝	土師器、須恵器	
名越遺跡（なごせいせき）	散布地	中世		瓦器、土師器、焼土	
清児遺跡（せちごいせき）	散布地	奈良～平安		石鏃	

図　　版

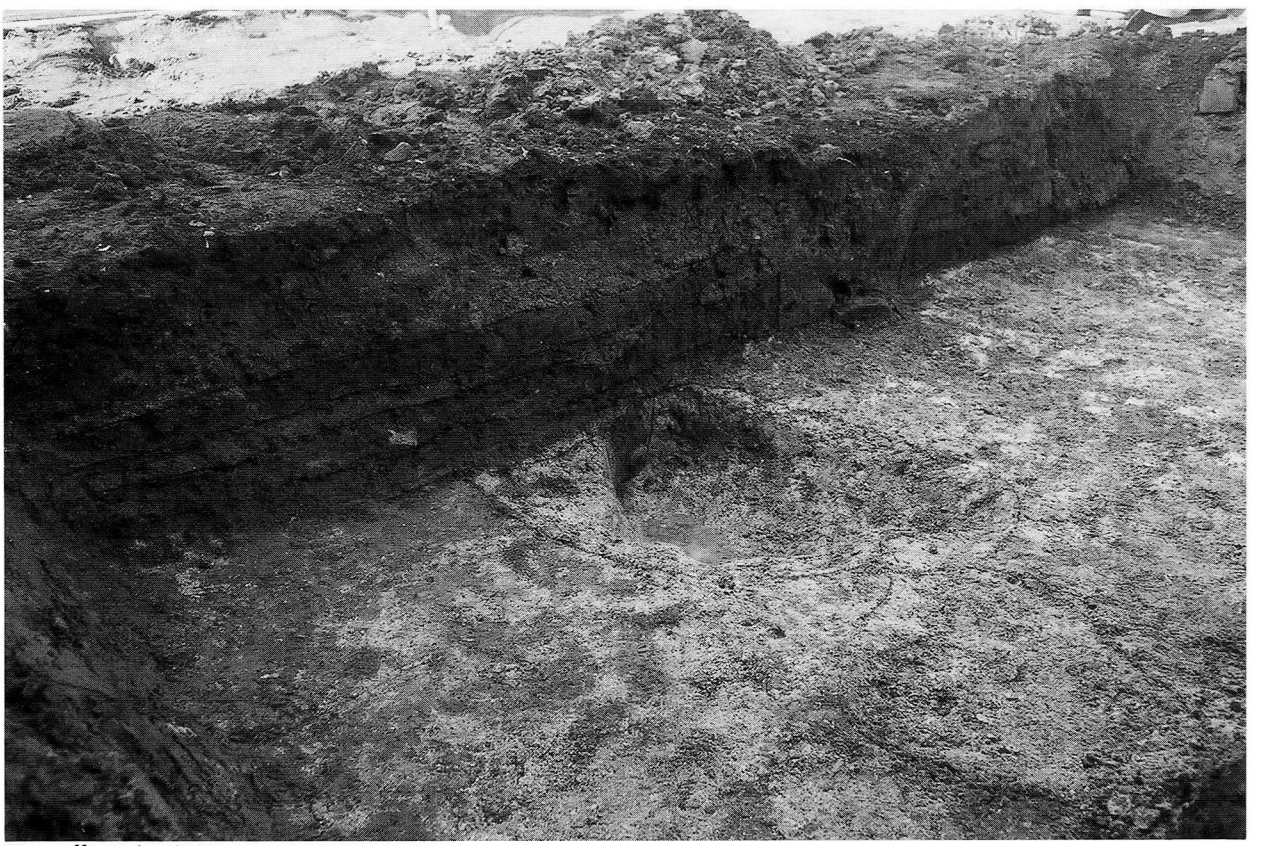
図版1　貝塚寺内町遺跡（2000－17区）

1．調査区全景　　北東より

2．ＳＸ－２（井戸）　　南東より

図版2　貝塚寺内町遺跡（2000－31区）

1．調査区全景　　南西より



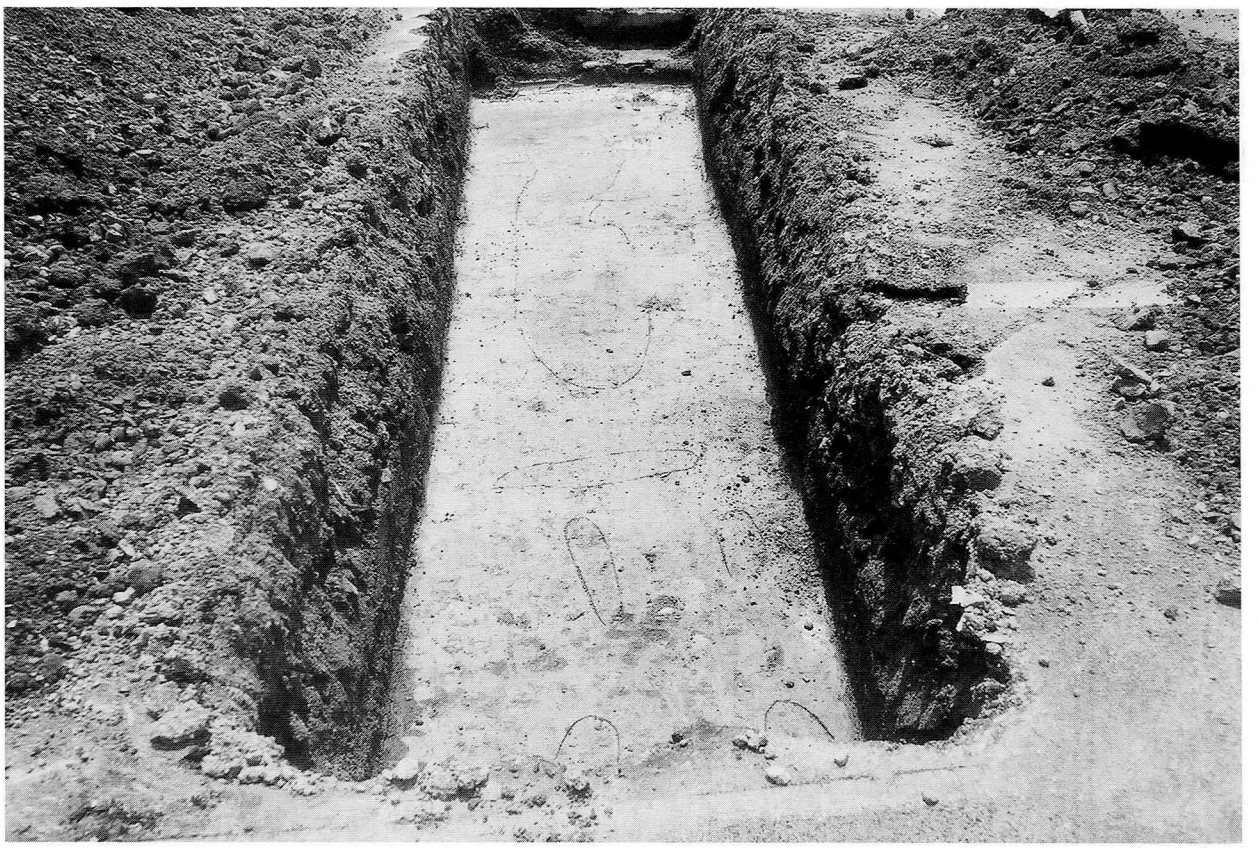
2．北西側断面　　南より

図版3　貝塚寺内町遺跡（20000-46区）

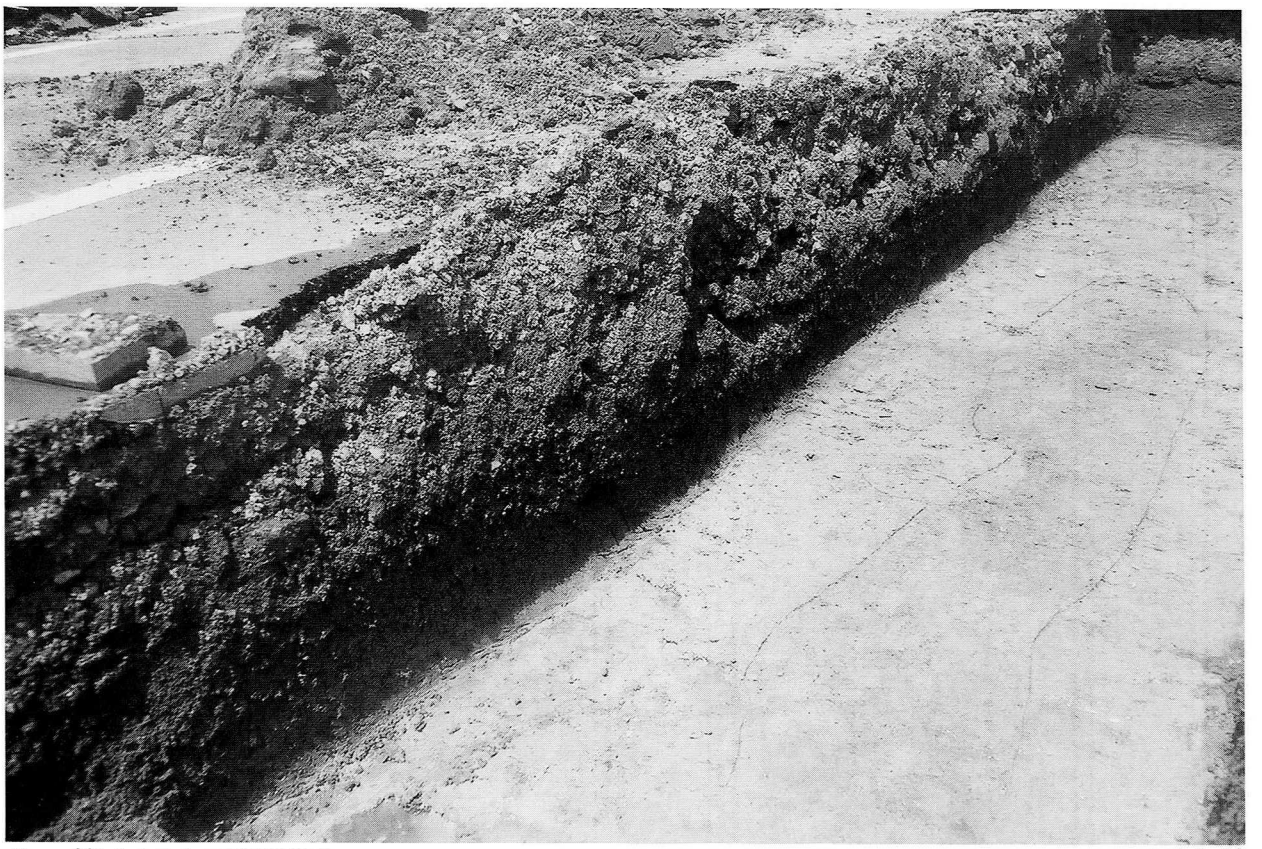
1．調査区全景　　北西より

2．北東側断面　　西より

図版4　澱池遺跡（20000－20区）



1．第1区全景　　北西より



2．第1区南西側断面　　西より

図版5　澱池遺跡（20000－20区）

1．第2区全景　　南西より

2．第2区北東側断面　　東より

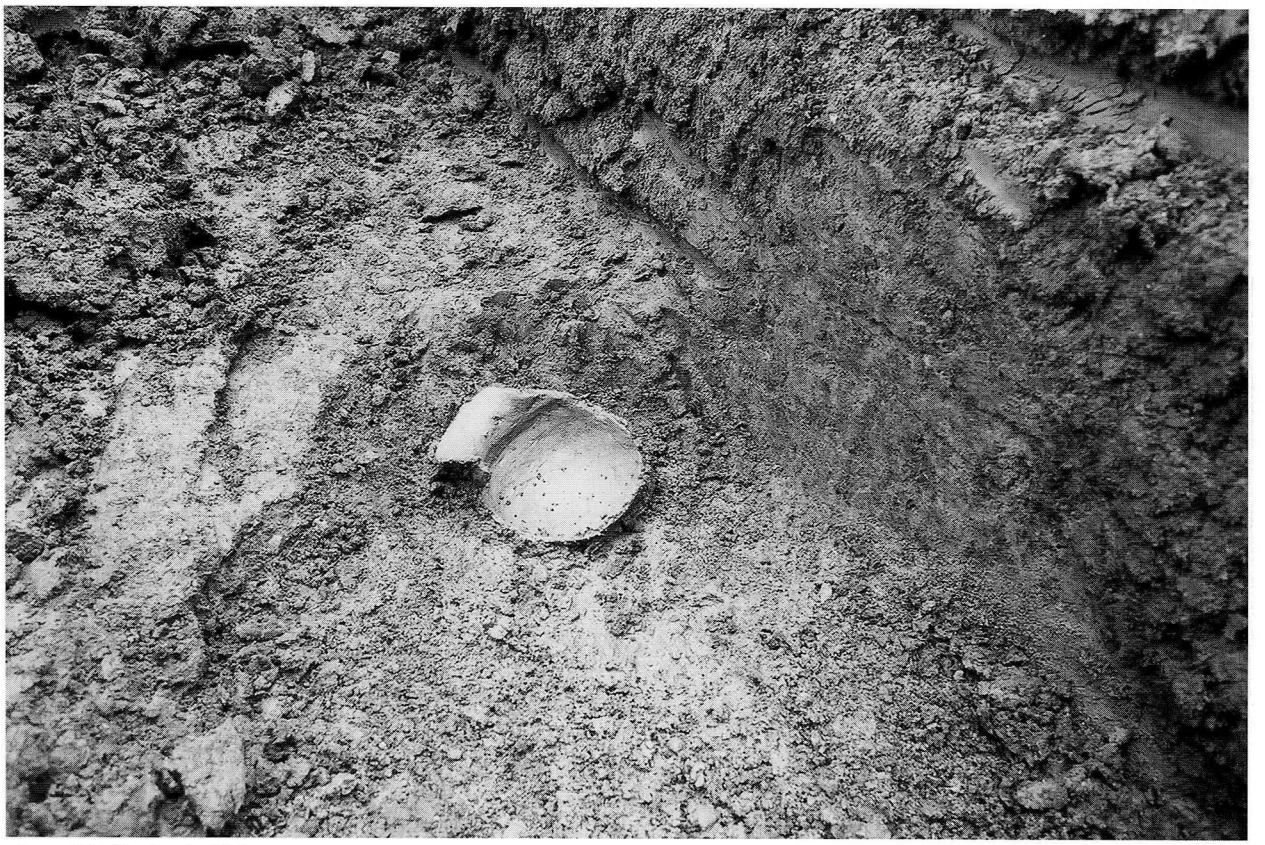
図版6　土生遺跡（2000－61区）

1．トレンチ１全景　　南西より

2．流路部分断面　　南東より

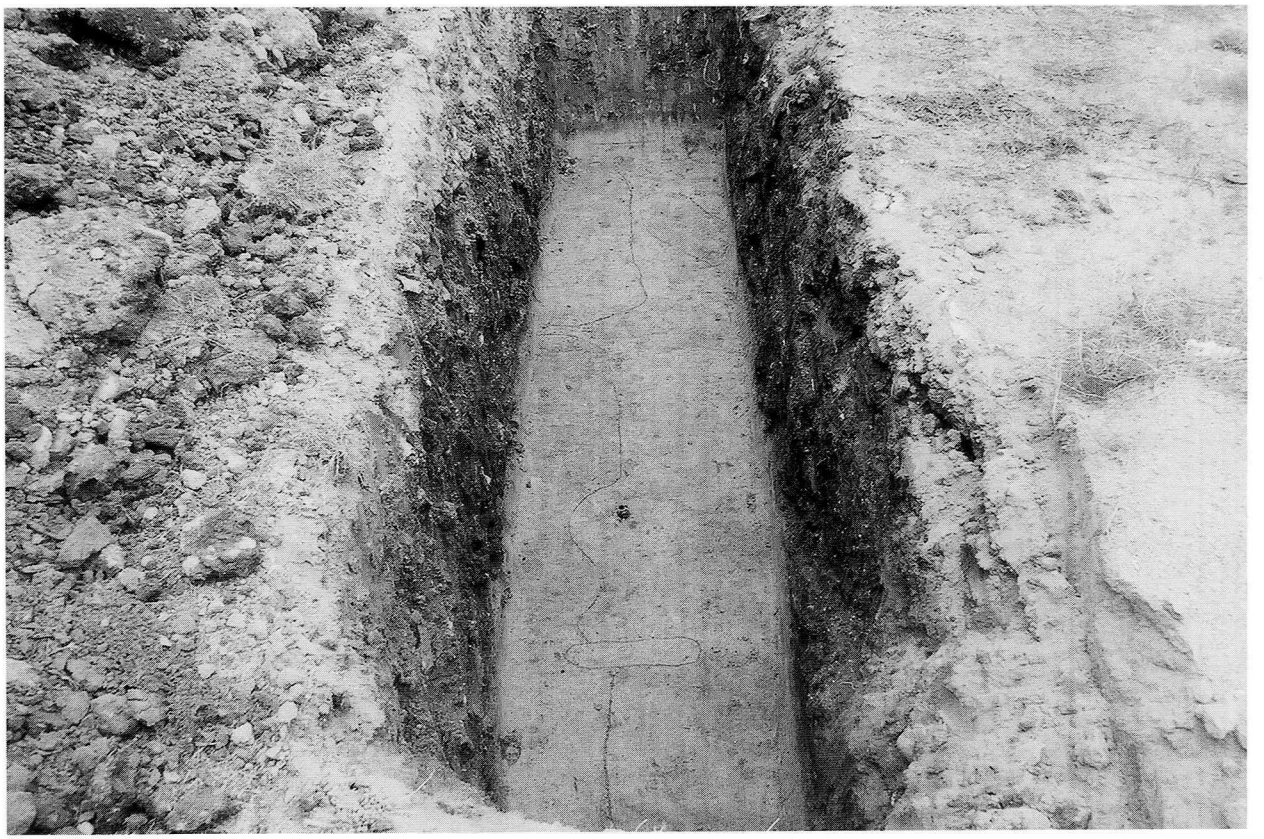
図版7　土生遺跡（2000－61区）

1．トレンチ2全景　　北西より



2．遺物出土状況　　南西より

図版8　名越遺跡（20000－12区）



1．調査区全景　　南西より

2．南東側断面　　西より

貝塚市埋蔵文化財調査報告第58集

貝塚市遺跡群発掘調査概要 23

発　行　日　　2001年 3 月 31日

編集・発行　　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中１－17－１

印　　刷　　㈲ 春 木 印 刷 所
岸和田市下野町２－２－８